

— 総説 —

海洋学の10年展望 (II)*

—日本海洋学会将来構想委員会化学サブグループの議論から—

神田 穰太^{1**}・石井 雅男²・小川 浩史³・小埜 恒夫⁴・小畑 元³・
川合 美千代⁵・鈴木 昌弘⁶・本多 牧生⁷・山下 洋平⁸・渡邊 豊⁸

要旨

化学海洋学を中心とする視点から、海洋学の過去10年程度の研究の進展を総括するとともに、今後10年程度の期間でわが国として取り組むべき研究の方向性について論じた。物質循環は依然として海洋学の主たる研究対象である。海洋における物質の定量は化学系の海洋観測の基本であるが、センサーを搭載した各種の能動型のプラットフォームにより海洋物理系の観測並みに高い時空間解像度を目指す方向が大きな柱になりつつある。一方で、このような高密度観測を補完するプロセス研究の重要性も指摘された。この両者の相互連携の仲立ちとしてモデルの役割が位置づけられ、また両者の連携による研究進展における新技術の導入および技術開発へのフィードバックの必要性が議論された。物質動態の可視化に不可欠なセンサーおよびプラットフォームの現状と展望、プロセス研究の対象となる未解明部分の例示、両者を統合した今後の物質循環研究のあり方とモデル海域の順で、研究基盤との関わりも含めて展望した。

キーワード：海洋学，将来構想，物質循環，研究基盤

1. はじめに一なぜ「いまだに」物質循環か？

海洋に存在する様々な物質の定量は、科学の歴史の中で多くの研究者が挑戦してきた課題である。海洋における試料採取技術や分析技術の進歩により、ようやく20世紀後半になって、海洋における主要な化学物質の分布が明らかにされるようになってきた。特に1980年代から現在に至る機器分析技術の急速な発展と、海洋環境試料の採取技術、とりわけ試料の汚染管理技術の進歩や世界標準試料の配布や分析手法の統一化によるデータ品質管理手法の進歩などにより、化学物質の分布やその変動について多くの情報が得られており、その全体像が把握

* 2013年5月29日受領；2013年7月30日受理

著作権：日本海洋学会，2013

1 東京海洋大学大学院海洋科学系

2 気象庁気象研究所

3 東京大学大気海洋研究所

4 独立行政法人水産総合研究センター

5 東京海洋大学先端科学技術研究センター

6 独立行政法人産業技術総合研究所

7 独立行政法人海洋研究開発機構

8 北海道大学大学院地球環境科学研究院

** 連絡著者：神田 穰太

〒108-8477 東京都港区港南4-5-7

TEL: 03-5463-0452 FAX: 03-5463-0452

e-mail: jkanda@kaiyodai.ac.jp

されつつある。

一方、地球化学や生態学の分野で培われた「物質循環」の概念がこの間に海洋研究に取り入れられてきた。特に地球規模の環境変動に対する関心を背景に、炭素などのいわゆる生元素の循環が様々な時空間スケールで研究の対象にされてきた。特に海洋では、大気中の温室効果気体の変動と海洋の物質循環の関わりが大きくクローズアップされ、1990年代からの複数の大規模国際共同研究プロジェクトを通じて、海洋の物質循環に関する研究は大きく進展した。これらの成果により、物質循環についての地球科学的アプローチ（旧来の地球化学を超えて）や生物学的アプローチを統合した生物地球化学 biogeochemistry の体系は、海洋研究においても重要な地歩を得ることにもなった。

このようにして海洋の物質循環の理解が進む中で、例えばごくわずかずつ進む海洋表層の酸性化や深層の貧酸素化の検出や、様々な周期の大気・海洋システムの経年的振動が化学物質の変動に反映される事例の発見などの観測成果が得られている。しかしこれらの観測成果と対になる物理的項目の観測データを比べると、その解像度の粗さを改めて認識せざるを得ない。日本海洋学会将来構想委員会・化学サブグループの議論の中では、物質動態について物理系の解像度と見合った時空間情報がない点が一致して指摘された。すなわち、我々はまだ物質循環の実像を目にしていけない可能性が高いのである。3次元の空間分布に時間変化を加えた4次元の物質動態が、高解像度のいわば「ハイビジョン」（石井雅男）で可視化されたとき、我々の物質循環への現在の理解が、この高解像度データによる検証に耐えうるレベルであるという保証はない。

他方、例えば鉄の生物生産過程への支配的影響が発見（再発見）されて以降、海洋の物質循環像が一変した例を見れば明らかなように、物質循環系を構成する各プロセスの正確な把握は依然として重要な課題であり続けている。物質循環は物理プロセスと生物プロセスの両方に関わる複合的システムであり、海洋で起こっている物質をめぐる諸事象には未知の因果関係が作用している可能性が高い。ハイビジョン的な可視化によって物質の動態が把握できたとしても、それ自体が直ちに物質循環の理解を意味するものではない。この意味で、物質循環を将

来予測可能なレベルで理解しようとする際には、ハイビジョン的な可視化と並行したプロセス研究が必要である。

本報告では、物質動態の可視化に不可欠なセンサーおよびプラットフォームの現状と展望を取り上げる（2節）。次いでプロセス研究の対象となる未解明部分をいくつか取り上げて紹介する（3節）。最後に、両者を統合した今後の物質循環研究のあり方について、モデルとなりうる海域と共に展望する（4節）。

2. ハイビジョン観測による物質動態の可視化

2.1 化学計測のセンサー化

海洋における化学成分の分析・解析は、高精度、正確さ、高度な専門的知識が求められ、いわゆる職人芸の世界で、その道の専門家のみのものであった。従って、少数の熟練した専門家が実際に現場に赴いて分析・解析することが求められてきたため、取得データ数がこれまでは限定されてきた。このため、海洋の化学成分のデータ統合化を行うことは困難であり、リアルタイムでの物質循環の動態を把握するには至っていない。

近年、国際アルゴ計画のプロファイリングフロート観測網により、全海洋の約3,500点において水温・塩分の鉛直分布の詳細な観測が可能となり、表層混合層の時空間的変動の把握など海洋物理学研究のパラダイムシフトを実現しつつある。一方、これらプロファイリングフロートの一部には酸素センサー、硝酸センサー、蛍光光度計、後方散乱計が搭載されている。これらのデータの精度、正確さは船上での分析に比べて劣るもののその時空間的な高解像度の圧倒的な情報量は海洋化学にとって新たな知見を与えつつある。さらに水中グライダーも普及しつつある今日、精度、正確さは低い为数多くの情報量を提供する化学・生物センサーの開発がますます重要視されている。これについては、例えば *Limnology and Oceanography* 誌の特集号 (Dickey *et al.*, 2008) を参照されたい。

今後、海洋の化学成分の分析は、船舶観測による従来のものとともに、化学計測センサー化、これらを搭載したプラットフォーム（プロファイリングフロート、係留ブイ等）の展開によって進展し、その時空間的に圧倒的

なデータ群により新たな海洋科学的知見が得られると期待される。

2.1.1 溶存酸素センサー

北太平洋では、亜寒帯域、親潮域、亜熱帯域、東部熱帯域の酸素極小層、そして日本海の深層で、広範囲かつ長期に溶存酸素の減少傾向が観測されている (Ono *et al.*, 2001; Watanabe *et al.*, 2001; Nakanowatari *et al.*, 2007; Mecking *et al.*, 2008; Stramma *et al.*, 2008; Kouketsu *et al.*, 2010; Takatani *et al.*, 2012 など)。その原因として、温暖化 (=成層化) によるベンチレーションの弱まりや、亜寒帯循環の強化による躍層からの低酸素水混合の強まりなどが挙げられており、なお議論が続いている。しかし、海洋の物理循環や物質循環のなんらかの長期変化が、溶存酸素濃度の減少を引き起こしていることについて、疑問をはさむ余地はない。

これらの例が示すように、溶存酸素濃度の分布・変動は、海洋の物理循環・物質循環の様相や変動を知る上で、極めて重要なトレーサーである。また、炭素循環を駆動する海洋表層の生物群集による生産を評価したり、海洋内の二酸化炭素 (CO₂) 濃度の増加に対する人為起源 CO₂ の蓄積と物理循環・物質循環の変動の寄与を分別する上でも、溶存酸素濃度の時空間変動の情報は大変有効である (Gruber *et al.*, 2010)。酸素センサー付き CTD の観測データによって、ウィンクラー法による離散的な各層採水観測のデータや、CTD による水温・塩分の鉛直プロファイルだけでは検出できなかった海洋の微細構造も明確になり始めている (気象庁, 2013)。

酸素センサーを搭載したプロファイリングフロートや水中グライダーの運用、データの検定やデータベース PACIFICA (PICES, 2013) などを活用した現場検証、そしてデータ公開の体制を整備して、溶存酸素濃度の観測を拡充できれば、広域の4次元的な酸素濃度変動や、船舶では観測が困難な中・高緯度域の厳冬期やメソスケール・サブメソスケールの現象に伴う酸素濃度の変動を追跡できるようになる。これによって、北太平洋の溶存酸素の減少傾向の実態と原因のほか、海洋内部のベンチレーションや亜表層の物質循環の実態解明も飛躍的に発展するものと期待される。

センサーの現状：溶存酸素センサーは、未だ改良の余地はあるものの、海洋観測への普及が期待される化学センサーの中で最も技術的完成度が高く、小型で消費電力の少ないセンサーの実用化が進んでいる。中でも安定性の高い Aanderaa Oxygen Optode や SeaBird SBE 43 などがプロファイリングフロートや水中グライダーに搭載されているほか、耐圧アクリル窓の外側に塗布したリン光物質に励起光を当て、酸素飽和度に応じて変化するリン光時間を測定することで速い応答を実現した JFE アドバンテックの RINKO-III が、海洋研究開発機構の「みらい」や気象庁凌風丸・啓風丸による CTD 観測にも使われ始めている。センサー応答の遅延を補正する式は、Uchida *et al.* (2008) によって提案されており、ウィンクラー法で測定された各層採水のデータでドリフトや圧力ヒステリシスを補正すれば、条件にもよるが 1 μmol kg⁻¹ レベルの高い精度でデータを取得できる。

酸素センサーを搭載したプロファイリングフロートによる観測はすでに始まっており、ラブラドル海におけるベンチレーション変化の研究 (Körtzinger *et al.*, 2004) や、ハワイ近海の亜表層における純群集生産の研究 (Riser and Johnson, 2008) などについて、その特性を活かした興味深い研究成果が報告されている

2.1.2 炭酸系計測センサー

海洋の炭酸物質の分布と変動は、一方で光層の生物群集による有機物生産・炭酸カルシウム殻形成や光層下の有機物分解 (呼吸) ・炭酸カルシウム溶解により、他方でこれらの生物過程の結果生じた濃度勾配を解消させる方向に作用する海洋の物理的拡散・混合・循環に強く影響を受けている。その変動は、大気・海洋間の CO₂ 交換速度を変化させ、長期的に大気中の CO₂ 濃度に大きな影響を及ぼしている。

また海洋は、化石燃料消費や森林破壊によって排出された CO₂ のおよそ 1/4 を吸収し、大気中の CO₂ 濃度の増加を抑制することで、地球温暖化の進行を緩和している (Canadell *et al.*, 2007 など)。実際に多くの海域では、炭酸系測定の高精度化によって、表面水のほか海洋の内部でも CO₂ の経年増加が観測されている (Brix and Gruber, 2004; Murata *et al.*, 2007, 2012; Dore *et*

al., 2009; Ishii *et al.*, 2009, 2011; Midorikawa *et al.*, 2012a,b; Kouketsu *et al.*, 2013 など)。また同時に、海洋の CO₂ 増加は、「もうひとつの CO₂ 問題」とも呼ばれる海洋酸性化を引き起こすため、海洋生態系や物質循環への影響が危惧されている。海洋酸性化の進行は、基本的に大気中の CO₂ 増加と海洋の物理循環場に支配されていると考えられるが、気候変化や海洋温暖化に伴う物理循環場の変化や、物理循環場の変化と海洋酸性化に伴う物質循環の変化も、その進行に顕著な影響を及ぼすはずである。たとえば、北太平洋で観測されている長期の酸素濃度の減少は、有機物分解による海水中の CO₂ 濃度の増加傾向と連動しており、海洋内部の酸性化を加速させている。

海洋における炭酸系観測は、大気・海洋間の CO₂ 交換や海洋への CO₂ 蓄積・海洋酸性化の実況把握はもちろん、それらの変動を制御する海洋表層の純群集生産や海洋の表層から内部への CO₂ 輸送メカニズムを解明し、地球温暖化予測や海洋酸性化予測の信頼性を向上させるためにも、重要な観測である。他の化学パラメータの観測と同様に、基盤となる採水分析データの品質を改善しながら、高精度のデータ取得やプロセス解明が目的の船舶観測を継続し、品質管理されたデータベースを作成・更新してゆく必要がある。さらに、高解像度の時空間変化のデータを取得できるセンサー搭載プラットフォームによる遠隔自動観測や衛星観測と組み合わせ、観測ネットワークを拡充させていくことが強く望まれる。

センサーの現状：炭酸系パラメータ (CO₂ 分圧 [pCO₂]・全炭酸・全アルカリ度・pH) の中で、自動観測のセンサー開発が進んでいるのは、pCO₂ と pH である (Byrne *et al.*, 2010)。

係留系やドリフター用の表層 pCO₂ センサーについては、ドリフターの CARIOCA システムが 1990 年代に開発され、北大西洋などで運用されている (Hood *et al.*, 2001 など)。また、MBARI (Monterey Bay Aquarium Research Institute) のシステムや、Sunburst Sensor 社の SAMI (Submersible Autonomous Moored Instrument) - CO₂ も実用化され、市販されている。前者は船舶の航走観測と同様に NDIR (非分散型赤外線分析計) を使うシステム、後者はガス透過膜を介した液液平衡と酸塩基指示薬の変色から pCO₂ を測定するシステムであ

る。後者と測定原理が同じ装置は、海洋研究開発機構でも開発されている。

最近、プロファイリングフロートに搭載して pCO₂ の鉛直分布を 1 日 1 回ほどの高い頻度で観測できる CONTROS/HydroC[®] も開発され、大西洋のケープベルデ近海で試験が行われた (Fiedler *et al.*, 2013)。しかし、NDIR を搭載しているため小型化が難しく、CO₂ 透過膜を介した応答が遅いため、長期にわたる高精度観測の実現には至っていない。プロファイリングフロートや水中グライダーへの実用化が最も近いと予想されるのは、Durafet[®] pH センサーである (Martz *et al.*, 2010)。Durafet[®] は、医療分野への応用を目指して開発された半導体センサー (Ion Sensitive Field Effect Transistor : ISFET) であり、小型で応答も速い。ドリフトはあるが、1 カ月程度の観測期間なら測定精度は 0.005 と報告されている。これは、船舶での分光光度法による高精度 pH 測定の精度 (~0.002) に比べて、さほど劣ってはいない。国内では下島らが 1990 年代から ISFET の海洋 pH 観測への実用化を行ってきた (下島・許, 1998)。

2.1.3 栄養塩 (マクロ栄養塩) 計測センサー

海洋における栄養塩の濃度と分布は、海洋の一次生産を左右し、海洋の生態系と海洋の物質循環、ひいては気候変動に影響を与える。栄養塩は、その重要性により古くから測定されてきた項目であるが、未だその動態には不明な点も多い。例えば、有機物の再無機化速度の時空間変動、窒素固定・脱窒過程における窒素・リン比の変動、局所的なイベント (低気圧、降水、黄砂など) による表層への栄養塩の供給過程と生物応答などは依然として解明の待たれる点である。これらについては、生物過程のように短い時定数の過程に合わせた時系列観測と、現在の海洋観測船観測ではカバーできないより詳細な空間把握が必要であり、これはすなわち栄養塩計測センサーを搭載したプラットフォーム (プロファイリングフロートや時系列観測機) 展開による 4 次元観測に他ならない。栄養塩計測センサー開発と搭載・展開により、栄養塩の全球規模の循環、時間的変化 (数時間から数十年規模の変動まで)、海域や生物種による栄養塩取り込み比の違いなどについて、高い解像度での把握を進めて詳細かつ

定量的に理解することができれば、これまでの海洋化学および地球化学の概念に変革をもたらすと同時に、水産資源の管理や気候変動の予測などにつながる重要な知見を得ることが期待できる。このような観測の主なターゲット海域としては、栄養塩大循環の要である極域および湧昇域、時空間的変動の大きい沿岸域、窒素固定の盛んな亜熱帯域などがあげられる。また、近年注目されている栄養塩濃度の低い亜熱帯域における有機物生成過程を明らかにするためには、ナノモルレベルの栄養塩センサーおよび溶存有機態の窒素やリンを測定するセンサーも望まれる。

センサーの現状：現在市販されている栄養塩センサーは、海水と発色試薬を混合して吸光度法で測定するものが多い(SubChemのAPNA, WETLabのCycle-PO₄, EnvirotechのEcoLABなど)。このタイプは、応答時間が遅く、測定により廃液が生じ、試薬の交換の必要があるといった問題がある一方、従来の実験室実験と同様の原理であるため信頼性が高く、ナノモルレベル栄養塩測定などへの展開が期待できる。

一方、常法の測定原理とは異なり、紫外線スペクトルの吸収特性から濃度を推定するセンサーが硝酸塩について近年開発されている(SatlanticのISUS, TriOSのProPSなど)。CDOM(有色溶存有機物)や懸濁粒子などによる吸収の補正が必要な場合があるが、小型で利用が簡便であることから、係留系への搭載などに利用され始めている。ただしプロファイリングフロート等への搭載には未だそれ自体が大きすぎる点などの問題がある。ケイ酸とリン酸塩についても、試薬を用いず電気化学的測定法を用いたセンサーの開発が進められているが、未だ実用レベルのセンサーには至っていない(たとえば、Jońca *et al.*, 2011; Giraud *et al.*, 2012)。溶存有機態窒素・リンを測定するセンサーは現在のところ存在しないが、その必要性は研究者および開発者の間で認識されている(ACT, 2006)。

2.1.4 堆積物間隙水中濃度および堆積物-海水間フラックス計測センサー

堆積物の続成過程や堆積物-海水間の物質移動は、海洋における栄養塩、炭素、金属などの除去・供給過程を

含む物質収支を知る上で重要である。さらに、温暖化や海洋酸性化が、直接的あるいはバクテリア活性などを通じて間接的に堆積物からの物質フラックスを変える可能性があるため(Rysgaard *et al.*, 2004; Widdicombe, 2009)、堆積物中の間隙水濃度やフラックスの観測による変動の有無を確かめることの重要性が高まっている。例えば、堆積物から海水への炭素やリンの回帰、脱窒とアナモックス、堆積物上での炭酸カルシウムの溶解などの変化を定量的に捉えることは、気候変動研究だけでなく海域の生物生産過程研究に関わる重要な研究課題である。有機物フラックスが小さいながら空間的には大きな面積を占める外洋域での研究を行うことはもちろんであるが、上記の物質収支ならびに気候変動関連の研究をするうえでは、有機物フラックスが大きく生物量の大きい沿岸域が主なターゲット海域となる。沿岸域の堆積物は外洋域に比べて時空間的に不均一である場合が多いので、空間的に数キロから数十キロスケールの詳細な観測が必要である。それを実現するためには、海水とのわずかな濃度差を測定できる精度を有し、簡便で長期的な現場測定を維持することが可能なセンサーの利用が望ましい。

センサーの現状：これまでに、O₂などの溶存気体、pHやpCO₂などの炭酸系、Mn²⁺、Fe²⁺、Ca²⁺など金属イオン濃度を測定するマイクロセンサーが開発され、現場での堆積物間隙水中濃度測定に用いられている(原理及び文献がTaillefert *et al.* (2000)にまとめられている)。市販の装置では、例えばUnisenseのMiniProfiler MP4があり、堆積物表層の詳細な(空間分解能50 μm)プロファイルを観測することが可能で、O₂、H₂、N₂O、NO、pH、H₂S、酸化還元電位、比抵抗の8種類のセンサーを搭載でき、1か月までの係留観測も可能である。その他の方法としては、渦拡散法を用いて酸素フラックスを求める装置も製作され、使用されている(例えばKuwae *et al.*, 2006)。今後は、間隙水中のプロファイル測定や渦拡散法に適用するための微小で応答速度の速い栄養塩センサーの開発と、長期係留の実施が望まれる。

2.1.5 微量金属計測センサー

生物生産に関わる海水中の微量金属元素として鉄は最も重要な元素である。特に北部北太平洋には高栄養塩低

クロロフィル (HNLC) 海域が広がっており、植物プランクトンの成育の主要制限因子は鉄と考えられる (Tsuda *et al.*, 2003; Boyd *et al.*, 2004)。このため、表層の生物生産の変化を生物活動の時空間スケールで追跡するためには、海水中の鉄濃度を連続測定する必要がある。例えば、表層への鉄の供給プロセスの一つは大気からの鉱物粒子の降下である。黄砂などの鉱物粒子の降下とそれに伴う植物プランクトンブルーム (Yuan and Zhang, 2006) を、鉄散布実験の結果 (Tsuda *et al.*, 2003) などから想定すると、数日という時間スケールで起こると推測される。このような時間変化を追跡するためには、一日数回の分析を必要とする。外洋域の表層水中の鉄濃度は $<0.05\text{nM}$ ~ 0.5nM 程度と低いいため、これに見合う極微量の鉄を測定できることが望ましい。また、植物プランクトンの種組成や成育速度に影響を与える微量金属として鉄に加えて、銅・亜鉛・コバルトなどが挙げられており、これらの金属元素に対するセンサーの実用化も急がれている。

深海においては、熱水活動域調査のトレーサーとして微量金属元素は注目されている。これまでの海底熱水活動域における研究 (Gamo *et al.*, 1996, 2004) から、熱水ブルーム中の微量金属元素を測定することにより熱水噴出口の場所を特定するという調査法は有用であることが分かっており、センサーを利用した研究の展開が期待される。

センサーの現状：海水中の鉄については、 0.05nM ~ 2nM 程度の濃度範囲を測定できるセンサーの開発が望ましい。センサーに利用できる有力な分析法は、化学発光法・電気化学分析法などであるが、無人連続測定という課題を克服しなければならない。特に電気化学分析法の場合には、測定の妨害となる有機物を分解するために反応管内蔵型紫外線ランプなどを前処理に使用する必要がある。将来的には、生物に利用可能な鉄濃度を測定するため、有機錯体鉄・鉄 (II) などの化学種別分析システムの開発も課題となる。これらのシステムは、銅・亜鉛・コバルトなどの金属元素にも適用できるであろう。

熱水活動域において、マンガンは海水中的での酸化速度が比較的遅いことから、熱水ブルームの良いトレーサーとなることが知られている。マンガンの分析法としては化学発光法が使用されており (Okamura *et al.*, 2001),

熱水ブルーム調査ではすでに実績を挙げている。また、熱水活動により放出された鉄は比較的安定に存在し (Bennett *et al.*, 2008), 熱水ブルーム探査の良い指標になると考えられる。表層の微量金属元素測定用に高感度なセンサーを開発すれば、熱水ブルーム探査にも応用できると期待される。しかし、深海調査の場合、高度な耐圧技術が求められる。さらにセンサーを曳航しながら観測を行うことを想定すると、小型化が必須である。これらの技術開発によって、実用化の道が開けて来ると考えられる。

2.1.6 溶存有機物計測センサー

溶存有機物は海洋の物質循環像を構築する上で重要な構成成分のひとつであるが、未だその収支の定量化は困難な研究課題である。この量的指標である溶存有機炭素濃度のセンサーを用いた4次元観測は極めて重要であるが、そのようなセンサーは現在のところ存在せず、今後の開発が望まれる。一方、溶存有機物中には紫外~可視領域の光を照射すると蛍光を発する成分 (蛍光性溶存有機物) が存在する。従って、クロロフィルセンサーと同じ原理の蛍光センサーを用いることで、蛍光性溶存有機物の4次元観測を容易に行える。近年、溶存有機物用蛍光センサー (いわゆる CDOM センサー) が WET Labs, Turner Designs, TriOS などから市販されており、陸域水圏および沿岸域での使用例が報告されている (たとえば、Chen and Gardner, 2004; Spencer *et al.*, 2007)。既存の CDOM センサーを用いることにより、主に土壌由来腐植物質を検出することができるため、沿岸域においては、陸起源有機物の挙動を評価できる可能性がある。また、上記 CDOM センサーとは異なる波長域に励起源・検出部を有するセンサーを利用することで、主に自生性であるタンパク質様蛍光の検出も可能となる。すなわち、複数の光学センサーを用いることにより、起源および反応性の異なる溶存有機物を同時に評価する事も可能であり、多波長型 CDOM センサーの開発も望まれる。多波長型 CDOM センサーを沿岸域の観測プラットフォームに組み込むことで、溶存有機物の起源や反応性を考慮した物質循環および生態系の評価が期待される。

一方、外洋域では、蛍光性溶存有機物に占める陸起源

腐植物質の割合は小さく、ほとんどは自生性の海洋性腐植様蛍光物質である。海洋性腐植様蛍光物質は生成後、光化学的に分解するものの、生物学的には難分解であると考えられている (Yamashita and Tanoue, 2008)。また、有光層以深において、海洋性腐植様蛍光強度と見かけの酸素消費量との間には直線関係が確認されており (たとえば, Hayase and Shinozuka, 1995; Yamashita and Tanoue, 2008), その直線関係の切片は preformed 栄養塩と同様に水塊が沈み込む前の海洋性腐植様蛍光強度を示す。すなわち、溶存酸素センサーと同時に CDOM センサーを外洋域の観測に適用することにより、物理循環場の解析などへの応用が期待される。現時点では観測結果はほとんどないが、CDOM センサーによる外洋域の観測データを積み重ねて行くことにより、海洋性腐植様蛍光強度を新たな生物地球化学的パラメータとして確立できるかもしれない。尚、CDOM センサーの外洋域への適用にあたっては、既存 CDOM センサーの 10~100 倍程度の精度がある事が望ましく、CDOM センサーの改良・開発も今後の重要な課題である。

2.1.7 微生物学的計測センサー

海洋における物質動態を考えた時、特にマイクロ環境で生じる化学反応はそのほとんどが原核生物を主体とする微生物群集の代謝によるものであり、そこに化学と生物の境界線を設けることは不合理であろう。窒素の循環を例にとると、窒素固定、脱窒、硝化、アナモックス、タンパク質 (有機態窒素化合物) 合成あるいは分解など、いずれも微生物の代謝の結果として引き起こされている。従って、海水中の化学種を「化学的」に検出することに加え、物質循環に関与する微生物の時空間分布や活性を「生化学的」に検出することが不可欠である。このためには、環境 (海水等) に生息する複数種類の微生物を簡便に分離し、未知の微生物をも追跡できる簡便な同定技術の開発が必要となる。次世代シーケンサーの著しい発展に加え、キャピラリー電気泳動とレーザーイオン化質量分析技術を組み合わせた極めて簡便かつ正確な環境中の微生物同定技術の開発が進められており (Shintani *et al.*, 2002, 2005; Teramoto *et al.*, 2007 *a, b*), 近い将来、船上での微生物分析は飛躍的な進歩が期待される

(生物サブワーキンググループ報告; 浜崎ら, 2013)。さらに特定の遺伝子やタンパク質をターゲットとしたプローブの開発 (新規発光蛍光プローブなど; Aoki *et al.*, 2010 *a, b*; Kim *et al.*, 2011) と超高感度の検出技術 (水晶振動子など; Aizawa *et al.*, 2006) を組み合わせることにより、現場海水中で鍵種となる微生物の量や活性の自動計測技術のプラットフォーム (プロファイリングフロートなど) への展開が望まれる。

2.1.8 粒子計測センサー

海水中の懸濁粒子・沈降粒子は、海洋の物質を系から除去し再循環させる重要なキードライバーである。海水中の粒子計測センサーで既に確立しているものとして、懸濁物質の粒径スペクトルの観測を海中現場で行うシステム、LISST (Laser In Situ Scattering and Transmissometer) が挙げられる (Traykovski *et al.*, 1999)。この原理は、レーザー回折を基に、水中の懸濁物質による散乱光の角度強度分布を記録し、この分布を粒子濃度、粒径スペクトルに変換するものである。透過度計としても使用可能であり、海水中の粒子の鉛直分布、その時系列変化、沈降速度計測に貢献しており、既に市販化されている。

2.1.9 プランクトン計測センサー

プランクトンの観測・計測は海洋学研究の原点と言っても過言ではなく、古くから行われており、現在でもネットサンプリングは主に行われている重要な計測項目である。プランクトン計測センサーとして既に確立され実用化されているものとして、以下の2つが挙げられる。VPR (Visual もしくは Video Plankton Recorder) : プランクトンの研究は通常ネットサンプリングで行われているが、本装置は海中を曳航または垂直に移動される際に、浮遊するプランクトンの画像を高速撮影するものである (Iwamoto *et al.*, 2001)。1秒間に十数回点滅する高速ストロボフラッシュライト、デジタル CCD カメラ、ハードディスク、CPU、水中バッテリーケース等で構成されている。得られた画像データをあらかじめ準備されたデータベースと照合して画像解析、プランクトンの

同定・定量を行なうものであり、既に市販化されている（たとえば、WHOI, 2013）。現在、同装置による海中の懸濁・沈降粒子（マリンスノー）解析も試みられている。現状は粒子の大きさ、形状の解析のみであるが、将来的には粒子の“色”の解析から、粒子の化学組成の推定も期待されている。

LOPC (Laser Optical Plankton Counter) : 現場において、およそ $7\text{ cm} \times 7\text{ cm} \times 0.1\text{ cm}$ の測定部に導入された海水にレーザー光を照射、 $100\text{ }\mu\text{m}$ 以上の海水中のプランクトン、粒子をホログラム撮影することができ、画像解析からプランクトンの種同定、定量を行うことが可能で、既に市販されている（たとえば、Brooke Ocean, 2011; Herman *et al.*, 2004; Checkley *et al.*, 2008）。

2.1.10 一次生産計測センサー

一次生産測定には植物プランクトンの培養が必須であり、これまでは酸素法、炭素同位体法 (^{14}C もしくは ^{13}C) が主に行われてきたが、近年は培養することなく瞬時に一次生産を測定できる高速フラッシュ励起蛍光光度法 (FRR 法) が開発されている (Raateoja, 2004)。この原理は、暗所に適応させた植物プランクトンに対して光合成に有効な光を照射し、光合成電子伝達系 (PSII) の電子受容体を酸化した状態から還元した状態へと変化させて、生体内クロロフィル蛍光の誘導曲線を描かせるものである。

この FRR 法に基づく測定装置 FRRF (Fast Repetition Rate Fluorometry) は既に市販化されている。FRRF は、海水中で光源を高速 (高い周波数) で点滅させて、光源から出射される光を海水中の植物プランクトンに対して照射、植物プランクトンが発するクロロフィル蛍光を光電子増倍管で受光検知し、受光検知出力に基づいて植物プランクトンの PSII のパラメータを測定するものであり、これによって総一次生産が測定される。これまでに、係留系に設置して、高分解能な総一次生産データを得ているものがある (才野, 2007) が、機材が高額で大型であるため、高分解能な空間的展開には至っていない。

2.1.11 光学式セディメントトラップ

海水中の沈降粒子は、海洋の物質循環像を描き出す上で重要な要素であり、これを捕集する装置がセディメントトラップである。これまでは、一定期間、現場に係留した後、これを回収し、捕集された沈降粒子を研究室に持ち帰り分析を行ってきた。しかし、膨大な経費と労力、かつ煩雑な作業を伴っており、時空間的高分解能データを得るためのネックになっている。これを克服する手段として、現在、光学的セディメントトラップ (Carbon explorer) が開発されている。

この装置は、沈降粒子を画像撮影し粒子沈降量を光学的に推定するもので、形状はプロファイリングフロート様である。その概要は以下のとおり。任意の深度を漂流しながら数時間から一日程度、沈降粒子を透明な底を持つ測定室に捕集する。透明底越しに CCD カメラにより捕集された粒子を撮影し、画角の被覆率から沈降粒子量を推定する。また偏向撮影 (複屈折撮影) することで炭酸カルシウム粒子のみを撮影することも可能である。測定終了後はポンプにより捕集粒子を廃棄し、次の観測モードへ移行する。南極海の鉄散布実験時、鉄散布後に現場海域に投入、船が現場から離脱後、沈降粒子が増加する様子を記録することに成功している (Guay and Bishop, 2002; Bishop *et al.*, 2002, 2004; Bishop and Wood, 2009)。

2.1.12 化学センサーについての総合的議論

海洋の化学センサーのハイビジョン化の展開にとって必須項目は、(1) 高精度、(2) 高確度、(3) 高応答性、(4) 耐久性、(5) 小型化 (小電力を含む)、(6) 安価、(7) 品質管理が求められる。(1) と (2) を保証するためには、船舶観測によるこれまでの採取・分析・解析データと比較・検討することで、センサーの高精度・高確度の検定を行う必要がある。しかし、これだけでは、従来の熟練専門家データの域を出て居らず、時空間高分解能なデータによるハイビジョン化は実現できない。このためには、(3) から (7) の項目のクリアは必須である。

また、センサー開発・展開には資金面・人的資源の確保も欠かせない。既存センサーの高精度化・高応答化・

小型化、現有原理のセンサーへの新規展開・開発、あるいは新規センサー開発の前段階・暫定措置として既存測定装置の自動化にはこれまでの科研費などの競争的研究資金で賄うことが困難である場合が多く、学会のバックアップの下、民間との共同研究も視野に入れ新規の研究費枠を確保する必要がある。さらに、センサーの開発には時間がかかるのはもちろんのこと、そのセンサー検定と品質管理にはやはり高度な専門知識が必要とされ、これらを継続的に維持していくためには、学会などの粘り強い呼びかけを通して、国内に技術力のある機関の創設が必須となろう。

加えて、データが蓄積される段階での人的評価の問題にも触れなければならない。時空間的高分解能データの蓄積には研究面とモニタリング面の両面がある。特にモニタリングに関わる人材について、研究面での評価が有利とはいえない懸念があり、現在のような人材評価ではモニタリング作業に従事するものの減少が懸念される。このため、他分野の連携も視野に入れ、このような人材を育てる環境の整備とともに、従来の業績評価システムの適用を受けない研究環境と地位の確保が必要となろう。

センサーが開発された場合の展開として、単体でセンサーを使用することは稀でその多くはプラットフォームに搭載し、物理・生物パラメータとともに、化学センサーの統合的観測を行うことが想定される。プラットフォームとして考えられるものとしては、(a) 船舶・CTDへの搭載、(b) プロファイリングフロート・水中グライダーなどのラグランジュ的プラットフォーム、(c) 係留系・定点自動観測ブイなどのオイラー的プラットフォームが挙げられる。上記のセンサー必要項目(1)–(7)がすべて満たされていれば、どのプラットフォームへの展開も可能であるが、観測時点でのセンサー開発段階に応じて、プラットフォームを選ぶ必要がある。

最後に、センサー開発・展開がなされた後には、積極的なデータ公開がハイビジョン化を目指すためには必須である。さらに、新規の研究展開や、センサーデータとの比較を行う上で、研究観測船による従来の観測は欠かすことができず、研究観測船研究とセンサー展開は両輪であることを決して忘れてはならない。

2.2 4次元観測のプラットフォーム

1990年代以降の気候変動に関する研究の進展により、海洋の物質循環は長期的には定常状態ではなく、温暖化に伴う遷移状態にある事が明らかになった(たとえば、Doney *et al.*, 2009; Keeling *et al.*, 2010; Whitney *et al.*, 2013)。このような海洋環境の遷移を把握し将来を適切に予想するために、海洋環境の観測データの全球的、継続的なモニタリングの必要性が急速に高まっている。こうしたモニタリングは、海洋環境の空間変動と時間変動を分離し得るだけの時空間分解能を併せ持つ必要があるため、全海洋をカバーする高密度観測網の整備が必要となる。

また海洋生態学および水産学分野における研究の進展により、海洋生態系の多様性が小さい時空間スケールの環境多様性に大きく依存することがはっきりとしてきた。たとえば東部赤道太平洋沿岸部における小空間スケール内での魚類の多様性指数と、水温変動強度や地形の複雑性指数との相関(Mora and Robertson, 2005)、珊瑚礁における物理環境の多様性と生物群集の種多様性との相関(Messmer *et al.*, 2011)等が報告されている。栄養塩や酸化還元環境、pHなどの化学環境の多様性も同様に生物多様性に大きく寄与している。こうした生物多様性を左右する環境多様性の時空間スケールは、沿岸や外洋の高生産海域では特に非常に小さくなる(たとえば、Kono and Sato, 2010; Messmer *et al.*, 2011)ため、これらの海域では、上述のような長期的海洋遷移を把握するため以上に小時間スケールの海洋環境観測が必要となる。

上記で求められているような高時空間分解能の観測は、調査船観測だけでは到底実現できないため、主に2000年代以降、調査船観測を補完するための無人で展開が可能な海洋観測プラットフォームが多数開発されてきた。特に海洋物理分野ではプロファイリングフロートの全球展開の成功により、観測時空間密度の大幅な向上に成功しているが(物理サブワーキンググループ報告; 岡ら, 2013)、海洋化学的な測定項目は陸上・船上での分析操作や大容量の試料取得が必要なものが多いことから、船舶以外の観測プラットフォームを用いた全球観測システムの構築は大きく立ち後れているのが現状である。それで

も、化学観測に適応可能な観測プラットフォームの基礎技術は以下に述べる通り、数多く開発されてきている。今後個々の技術について開発を強力に進展させ、各技術の特性を明確化させるとともに、全球をカバーする高時空間分解能の海洋化学観測網を構築するための、海域、観測項目毎に展開すべき観測プラットフォームのベストミックスを検討・決定する必要がある。

2.2.1 基礎技術の開發現状

1) プロファイリングフロート

海面から水深 2000 m まで自動昇降を繰り返しながら漂流するフロートで、水温、塩分センサーが標準装備されている。国際アルゴ計画のもと、既に全海洋で 3600 個以上のフロートが投入され、100 万プロファイル以上のデータが収録されている (Argo Information Center, 2013)。既存展開数が最大の観測プラットフォームである。展開数が多いことから観測時空間密度の向上には最も即効性のある観測プラットフォームであるが、搭載する測器の重量と使用電力量に限りがあるため、適用可能な科学計測機器は軽量の化学センサーに限られる。このプラットフォームを用いた化学観測としては、溶存酸素センサー付きフロートの展開が既に開始されている他、硝酸センサー、pH センサー等のフロートへの適用が試験運用段階にある (International Argo Project, 2012)。

2) 水中グライダー

有翼式のフロートであり、プロファイリングフロートと同様に海洋中で自動昇降を繰り返すが、昇降の際に筐体や翼の姿勢を制御することによって指定した方向に水平移動をすることが可能である (Lembke, 2012)。1 台で 3~5 年、最大航続距離 4 万 km 程度の観測が可能である。搭載可能な測器の重量と使用電力量もプロファイリングフロートに比べれば大きいですが、基本的にはセンサー観測のみが適用範囲である。既に米国の 3 社で商業販売が開始されており、米国、ヨーロッパを中心に急速な普及が始まっているが、日本においてはまだ数台が試験的に導入されている段階 (たとえば、伊藤ら, 2010) に留まっている。

3) AUV (Autonomous underwater vehicles)

モータ推進の完全自律型無人潜水機であり、海洋工学

分野や軍事分野で旧来から使用されてきたが、近年になりこのシステムの海洋環境調査への応用が様々な研究機関で試みられている (Griffiths, 2003)。特にモンレー海洋研究所が開発中の大型 AUV は、1000 km 以上の航続距離と航行中の採水機能を備えており、港湾から半径 500 km 以内の近海域であれば、無人で採水観測を行って試料を持ち帰ることが可能である (MBARI, 2010)。

4) 篤志観測船 (VOS) による表面観測

無人観測プラットフォームではないが、商業貨物船に表層環境自動モニタリングシステムを搭載し、航路上の海洋環境調査を行う事が 90 年代から実用化されている (CDIAC, 2013)。原理的に海洋表面の観測しかできないが、測器の積載容量・使用電力量の制限をほぼ受けないため、化学センサー以外にも各種の自動観測装置を搭載する事が可能である。更に貨物船側の協力を得られる場合には、乗務員による採水試料の定期採取も可能である。既に北太平洋においては、海洋表層 pCO₂ と表層栄養塩の 50 パーセント以上のデータはこの篤志観測船によって得られたものとなっている (Wong *et al.*, 2002; 安中ら, 2013)。

5) 係留式プラットフォーム

海洋上の定点に係留系を設置して海洋観測を行う方法では、各種の化学センサーによる観測や海水、懸濁粒子、沈降粒子等の時系列自動採取が可能である。海底から海面まで緊張係留させたワイヤーに沿って自動昇降するセンサーシステム (自動昇降センサー) では連続的な鉛直プロファイルの時系列観測も可能だが、海面漁業やバングリズムの影響が大きい海域、また気象・海象条件の厳しい海域では、海底から推進 100-300 m まで緊張係留された係留系上に水中ウインチを設置し、亜表層から海面までを定期的にセンサー・採水ユニットを昇降させる昇降ブイシステム (才野, 2007; 日油技研工業, 2013) がより有効である。これらの係留式プラットフォームでは大容量のバッテリーを装備できるため、FRRF センサーによる一次生産力測定や、栄養塩の現場自動観測システム等の浮遊式プラットフォームでは不可能な大型自動測器を搭載できる利点がある。

6) 中性浮力セディメントトラップ

海洋浅層域における沈降粒子のモニタリングには、これまで漂流型セディメントトラップが多く使用されてき

たが、この方式は1) 波浪の影響により海中のトラップが上下する、2) 流れに必ずしも追従しない、3) (多くの場合) 蓋がない、等の欠点がある。そこで近年、自己浮力が調整できるプロファイリングフロートに筒状あるいは円錐型の蓋付きセディメントトラップを搭載した中性浮力セディメントトラップが開発され、欧米で数回の実用例がある (Valdes and Price, 2000; Lampitt *et al.*, 2008)。現在は数日間の「放流」で一回のサンプリングであるが、将来的には数ヶ月の放流で複数(時系列)サンプリングが可能となるようなシステムも考案中である。

7) 海底観測プラットフォーム

海底堆積物や海底直上環境の自動観測プラットフォームとして、間隙水および直上水用の各種化学センサーや直上水、懸濁物、沈降粒子の採取システム、海底インキュベーション用のチャンバーシステムを搭載した「海底モニタリングランダー」を海底に接地係留させるシステムが商業販売されている (Tengberg *et al.*, 1995; 小栗, 2013; Unisense, 2013)。国内でも散発的に短期モニタリングとして使用されているが、定常的なモニタリングに使用された例は未だ存在していない。

8) NEPUTUNE システム

陸上ステーションから延長数 100 km~数 1000 km にのぼる電源・通信ケーブルを海洋底に敷設し、その上に各種の係留型観測機器(化学センサーおよび採水システム付き自動昇降ブイ、流向流速計、ADCP、音響トモグラフィ、プランクトンカメラ等)および海底接地型観測機器(海底観測プラットフォーム、地震計、重力計等)を多数配置させた有線系総合海洋環境モニタリングシステムである (NEPTUNE Canada, 2013)。外洋に設置された NEPUTUNE システムの他に、沿岸域に設置されたより小規模なシステムがカナダ (VENUS システム: VENUS, 2013) および米国 (MARS システム: MBARI, 2013) に存在する。日本には地震および地殻変動計測のための有線システム DONET (海洋研究開発機構, 2013) が存在しているが、これに海洋環境測器群を増設すると同様のシステムになる。

2.2.2 今後の発展

外洋域においては、既に実用化されている、あるいは

間もなく実用化される化学センサー搭載プロファイリングフロートの迅速な展開に加えて、次世代の外洋域無人観測プラットフォームである水中グライダーの国内普及に重点を置くことが、最も即効性のある化学観測時空間密度の増加戦略である。ただしセンサー化が不可能な化学観測項目はこれらのプラットフォームが利用できないので、重要な海域には各種の係留型自動観測プラットフォームを展開させ、多項目の化学モニタリングを実施できる体制が必要である。

最も時空間変動の大きい海洋表層環境については、これに加えて採水観測可能な篤志観測船の数を更に増加させる事により、センサー観測が不可能な化学観測項目についても技術的な困難を伴わずに観測時空間密度を向上させる事ができる。ただし、定期貨物船の航海頻度が極端に少ない南太平洋や極域では篤志観測船による観測は行う事が出来ないで、上記の係留型自動観測プラットフォームによる表層の定期観測がより重要になる。

沿岸域では AUV による定期的な海水採取や、NEPUTUNE システムの様な有線係留系観測を用いて外洋より稠密な化学データを取得出来る可能性が有る。しかし外洋域に比べて物質の濃度やフラックスの時空間変動が著しいので、測定精度や分解能よりも時空間的な観測密度に重きを置いて推進すべきである。海水中の pCO_2 を例にとって見ると、外洋域においては $\pm 1 \mu atm$ 以下の精度が要求され、この性能を満たす連続計測システムの構築には技術的にも費用の面からも解決すべき課題が多い。一方、日変動が数 $100 \mu atm$ にも達する沿岸海域では、はるかに廉価なシステムの導入で十分な可能性がある。沿岸海域の複雑でダイナミックな物質動態の把握に最適な観測システムを構築するには、求められる性能(精度)と掛かる費用のバランスを十分に検討すること、そしてその検討に必要な基礎データの蓄積を進めてゆくことが重要である。

底層環境については、外洋においても沿岸においても継続的なモニタリング観測は殆ど行われていないのが現状であり、特に底層と表中層のリンクが大きい沿岸域において、早急に試験的な底層環境の継続モニタリングを開始する必要がある。

外洋、沿岸、底層のいずれにおいても、無人観測プラットフォームによる化学観測を展開維持していくための共

通の問題として較正の問題が有る。化学センサー観測による確度の確保は一般に非常に難しく、特に海洋展開後の経時的なセンサーのドリフトについては定期的な調査船による同時観測の実施により、適宜補正していく必要がある (Janzen *et al.*, 2008)。また濃度等の現存量については無人観測プラットフォームによる観測や試料採取がだいぶ現実的になってきた感があるが、一次生産による生元素の消費速度や有機物のバクテリア分解による再生速度など、物質のフローに関してはまだまだ無人プラットフォームによる観測は非現実的な状況にある。このため、無人観測プラットフォームの展開は調査船調査の展開とのバランスを常に考慮しつつ進める必要がある。単純に較正の問題だけを考えても、無人観測プラットフォームの数が増すだけ調査船調査の必要は並行して大きくなる。

3. 物質循環の未説明プロセス

3.1 有機物

海洋表層で生じた生物生産物が中深層へ移動することにより大気から海洋表層への CO₂ 吸収が促進される「生物ポンプ」の主役ともいえる生物起源有機物粒子は、まさしく海洋の物質循環のキーパラメータであり、20 世紀における海洋有機物研究の花形であった。現在でもなお、全容解明には至ってはいないものの、その動態や性状に関する膨大な情報がこれまでに得られている (たとえば Volkman and Tanoue, 2002)。特に 21 世紀に入ってから、古くて新しい問題として沈降粒子の動態に関する研究が様々な観点から進められてきている。この背景としては、地球温暖化予測の高度化に伴い海洋の生物ポンプシステムの定量的・メカニズムの理解の深化が広く求められてきていることがあげられる。定量的な面においては、従来確立されてきた普遍的な知見に対する見直しがなされており、炭素循環の評価の根幹にかかわる重要な問題として今後の展開が注目される (3.4.3 参照)。メカニズム的な面としては、植物プランクトンを出発点とした沈降粒子の生成過程と、沈降中の分解、変質過程を中心に研究が展開されてきている。前者に関しては、従来広く受け入れられてきた食物連鎖を通じた粒子の大型化 (特に動物プランクトンの糞粒生成) に代

わって、懸濁粒子間の物理化学的な凝集 (Passow, 2002) が着目されつつある。あるいは、直接は沈降粒子生成には結びつかないものの、溶存有機物からの自発的凝集によるマイクロゲル生成 (Verdugo, 2012) も、今後さらに研究を進めるべきテーマの一つといえる。後者の沈降粒子の分解・変質過程に関して、生物ポンプの効率に直接関係する「分解に対する抵抗性」のメカニズム (Hedges *et al.*, 2001) が、地球温暖化と海洋の炭素循環の相互関係を理解していく上で今後大きな鍵となるものと考えられる。

一方、コロイド粒子を含む溶存態有機物の研究が本格的に始まったのは、20 世紀の終わり 1990 年代に入ってからであり、未だにその化学的実体や物質循環における機能については未解明な点が多く残されている (たとえば Ogawa and Tanoue, 2003)。溶存態有機物は、物質循環における役割が粒状有機物に比べて明らかに多様であり、特に、単独ではなく有機物以外のパラメータの循環プロセスと共役する部分が多い。例えば、現代の海洋生態学を支える重要な基礎概念の一つ「微生物食物連鎖」では、溶存有機物はその起点となり、その利用性が食物連鎖全体を制御していることは広く知られている (Azam, 1998)。また、微量金属元素に対するリガンド (有機配位子) として、それらの挙動を制御し、さらにはそれが生物生産への制御にもつながっていることも理解され始めている (Benner, 2011)。あるいは、陸起源の物質、元素が海洋へ輸送される際の主要な化学形態 (あるいはキャリア) としての重要性も指摘されている (Krachler *et al.*, 2012)。しかし、このように溶存有機物が海洋の物質循環全体にわたり多様で且つ重要な機能を果たしていることが認識されている一方で、これまでに得られている情報量はあまりに不足している。本節では、このような背景のもと、海洋の有機物プールの大部分を占める溶存有機物を中心に、今後の有機物研究に対するいくつかの方向性、戦略についてまとめることにする。

3.1.1 海洋有機物の全容 (化学形) 解明 Census of Marine Organic Matter (CoMOM)

海水中の有機物は、大気 CO₂ に匹敵する炭素リザーバー

であるが、その化学形に関する知見は圧倒的に不足している。核磁気共鳴分析法や各種分光分析法など従来の機器分析手法も、有機物の詳細を解明するには至っていない(Ogawa and Tanoue, 2003)。一部の構造タンパク質がその起源生物も含めて同定されているものの、海洋有機物全体から見れば絶望的に断片的である。海洋の有機物(炭素、栄養塩)動態というパズルを解くためには、一片一片のピース(個々の有機物)を見極め、その目録作りをすることがこれからの海洋生物地球化学の発展の上で欠かせない作業である。

近年、MALDI-TOFMS(Matrix Assisted Laser Desorption/Ionization [マトリックス支援レーザー脱離イオン化] - Time of Flight Mass Spectrometry [飛行時間型質量分析法])などの発展により、従来では適用の難しかった高分子有機物の質量分析が可能になってきている(Nunn *et al.*, 2003)。また微量の有機物を、例えば生きている細胞の状態のままに3次元構造解析が可能にX線自由電子レーザー(XFEL)分析も開発されている(石川, 2013)。我が国は世界に先駆けて、共同利用可能なXFEL施設としてSACLAを有しており、海洋有機物研究に適用すれば世界に対して大きくリードできる状況にある。これらの最新手法を用いるにしても、当面は海水の大量サンプリングやそのハンドリング(濃縮等)技術の展開は不可欠である。海洋ハイビジョン化による3D、4D情報の蓄積に加え、研究船や観測ステーションによる詳細プロセス研究との連携により海洋有機物の全容解明が期待される。

3.1.2 外洋域における陸起源有機物貢献の再評価

海洋溶存有機物は、地球表層における最大級の還元型炭素プール(およそ700 PgC)を構成する。その巨大なプールの90%程度は生物学的に難分解な成分により構成されており、難分解性成分が海洋溶存有機物プールの消長を決定する。陸域から海洋へは河川を通して、年間0.4 PgCの陸起源有機物が供給されている。海洋溶存有機物の平均年齢が2,000-6,000年であることを考えると、陸起源有機物は溶存有機物中難分解性成分の起源の一つと考える事ができる。しかし、リグニンフェノール濃度(高等植物のバイオマーカー)から見積もった海洋溶存有

機物中に占める陸起源有機物の割合が3%以下である事(Opsahl and Benner, 1997; Hernes and Benner, 2002, 2006)、溶存有機炭素の安定炭素同位体比が-20から-23‰の値を示す事(Bauer, 2002)から、現時点では、陸起源有機物は海洋溶存有機物中にほとんど存在しないとされている。ただし、これらのパラメータを測定するには高い技術が必要であり、研究例は極めて限られている。従って、リグニンフェノールおよび安定炭素同位体比の簡便な分析法を確立し、様々な海域において、これらの分布を評価する必要がある。一方、陸起源有機物の除去過程に関しても十分な理解が得られているとは言い難く、沿岸域で集中的な観測を実施すると共に、プロセス研究を積み重ねる必要がある。また、新たな陸起源有機物のバイオマーカーを模索し、それを適用する事により、海洋における陸起源有機物動態に関して、異なった視点から評価を行う事も重要である。陸起源有機物の供給経路に関しても、従来は河川からの供給が主に評価されて来たが、大気からの供給経路も評価する必要がある。

3.1.3 海水中の金属に対する有機配位子

植物プランクトンの成育に対する鉄の重要性は、近年の数多くの研究によって明らかにされてきた(Boyd and Ellwood, 2010)。しかし、鉄の有機錯体、特にその有機配位子がどのような化合物であるかという点はほとんど解明されていない。海水中には、鉄と極めて安定度定数の高い錯体を生成する配位子が存在するため(Gledhill and van den Berg, 1994; Rue and Bruland, 1995)、当初は鉄と特異的に強い錯生成能を持つシデロフォアがこの配位子であろうと予想された。しかし、近年、海水中のシデロフォアを分析する方法が開発され、大西洋において実試料を測定したところ、シデロフォアは2-12 pM程度しか検出されなかった(Mawji *et al.*, 2008)。数百-千 pMレベルの鉄と錯生成するにはあまりに微量であった。このため、有機配位子の正体については、未だ不明のままとなっている。生物体の分解(Sato *et al.*, 2007)、腐植物質の生成(Laglera and van den Berg, 2009)など様々な過程が指摘されているが、有機配位子生成の主たる過程は解明されていない。海水中に存在する鉄のうち、どの程度を生物が利用できるか

という問題は、海洋の生物生産にとって重要である。近年の質量分析法の進歩は著しいため、これらの最新の分析法を駆使して海水中の有機配位子の構造解明を精力的に進めることが期待される。この問題は国際的にも認識されており、SCORに「Organic Ligands: A Key Control on Trace Metal Biogeochemistry in the Ocean」というWGが設置され（SCOR WG139）、これまでの知見が集約されつつある。日本からも廣瀬勝己会員（上智大学）がFull Memberとして参加している。

3.1.4 微細環境における有機物分解過程の解明

有機物の再無機化の多くは、細菌や古細菌、ウィルスなどの微生物による複雑な分解過程を介している。海洋における有機物の生成・分布は局在的であるため、微生物による再無機化はその微生物の周りの微細環境に大きく左右される。例えば、溶存有機物の排出に対して運動性・走化性をもつ微生物が素早く反応すること（Fenchel *et al.*, 2002）、TEP（Transparent Exopolymer Particle）やマリンスノーには海水に比べて高密度の微生物が付着しており、再無機化のホットスポットを形成していることが知られている。乱流による有機物の分配の影響（Taylor and Stocker, 2012）や、菌体外酵素の短期変動（Allison *et al.*, 2012）などの研究も進みつつある。このような微細環境における有機物と微生物の相互作用の変化が、海洋物理や大きなスケールの物質循環とどのような関係にあるのか（Stocker, 2012）、そしてそれらが今後どのように変化する可能性があるのかという点について、今後明らかにされる必要があるだろう。

3.1.5 今後の海洋有機物の研究展開に関するその他の視点

1) 化学的実体

溶存有機物の大部分は微生物分解に抵抗性を示す難分解性の画分であり、そのプールが存在することによって、潜在的に大気中のCO₂ガスの量が緩衝されていることが、近年広く指摘され始めている。そのメカニズムに対し、「微生物炭素ポンプ」という概念が提唱され、国際的な研究プロジェクトも動き始めたが（Jiao *et al.*, 2010）、

それについては別の節（3.4.4）で述べることにする。ここでは、溶存有機物の起源や続成過程に対する理解を深化する上で不可欠な、新しい技術の導入について少し補足しておきたい。

難分解性溶存有機物のプール全体に対する陸起源有機物の寄与は、今のところマイナーであるというのが統一された見解であるが（3.1.2参照）、確実な証拠が全て揃っているわけではない。また、溶存有機物に与えられている数千年という¹⁴C年代測定に基づく年齢も、あくまで平均値に過ぎない（Bauer, 2002; Ning *et al.*, 2004）。このような、20世紀の研究によって示されてきた溶存有機物全体に対する平均像は、「溶存有機物とは何か」を教えてくれたが、「何故そうなっているのか」に対する解は全く得られていないのである。従って、今後の研究の一つの進むべき方向としては、これまで主としてバルクの有機物を対象に解析されてきたものを、特定な化合物群、あるいは分子レベルでの理解を進めていくべきことは当然といえる。具体的な例としては、分子レベルでの炭素・窒素の安定同位体比、あるいは、分子レベルでの¹⁴C年代測定は、溶存有機物の起源や変質過程に関する情報、すなわち「何故そうだったか」の疑問に対する解へ、我々を確実に近づけてくれるであろう。それと並行して、有機物が実際に分解（変質）している環境（現場）を観察する技術を導入し（3.1.4参照）、これまでブラックボックス化していた有機物の分解過程に対しビジュアル化を進めることも望まれる。技術革新が目覚ましい、分子生物学や材料科学の分野では、有機物を1分子毎に観察する技術も確立されており（たとえばHoshino *et al.*, 2012）、それらの技術導入も検討していく価値があるだろう。

一方、難分解性溶存有機物の研究の進展の障害となっているのは、その大部分が、一般的な生体有機化合物（アミノ酸、タンパク質、糖、炭水化物、脂質等）では同定できない未知化合物であるという事実であろう（Ogawa and Tanoue, 2003）。この状態を打破するために20世紀後半に導入されたNMRによる官能基解析は、溶存有機物の化学的実体解明にブレークスルーをもたらしたのは間違いないが（3.1.1参照）、結局は、その実体に対し、「×××様の物質」という曖昧な記述を与えるだけに終わってしまっている。これに対し、今後は最

先端技術の導入を進め(3.1.1 参照)、最終的に溶存有機物を「構造式」として正確に記述できるような努力を続けられない限り、次なるブレークスルーはやってこないであろう。逆に、これが実現されれば、溶存有機物の動態解明が飛躍的に進展するだけでなく、「炭素の隔離技術」, 「未知なる生理活性物質の発見」(たとえば, Radhakrishnan *et al.*, 2009) など、他の研究分野への波及効果は計り知れないものがあるだろう。

2) ポテンシャル栄養塩としての溶存有機物の評価

3.4.1 で記述されているように、近年におけるナノモル濃度レベルの栄養塩類の測定技術の導入は、従来「海の砂漠」と称されていた亜熱帯を中心とした貧栄養海域における生物生産機構の解明に、ブレークスルーをもたらした。ただし、そのようなナノモルレベルの栄養塩動態でも説明がつかないような、活発な生物生産が行われているのも、また、事実として明らかになっている。生物達は「海の砂漠」で、窒素やリンを一体どうやりくりしているのだろうか？ 我々は未だこの疑問に明確に答えられずにいるが、その答えの一つのポテンシャルが溶存有機物にある。すなわち、溶存有機態窒素・リンである。亜熱帯海域の有光層内には、溶存有機態窒素がおおよそ 4,000 nM, リンが 200 nM 存在していると言われている。仮にこの中の数%が生物に利用されることができるとしたら、それはナノモルレベルの栄養塩類を補うのに十分すぎる量といえる。これら、溶存有機態窒素・リンの生物利用性の解明は、「海の砂漠」で行われている生物生産機構の理解の深化に不可欠な要素といえるだろう。

3) 溶存有機物プールの定常/非定常状態の解明

仮に、微生物炭素ポンプによって、人為起源炭素の一部が海洋の溶存有機物のプールに移入しているとするならば、そのプールの大きさは増大し非定常状態にある筈であり、また、それによって、海洋酸性化の進行は確実に減速されている筈である。現在、我々はこの重大な疑問には全く答えられずにいる。もちろん、このような問に答えるための戦略の王道、すなわち「高精度測定による長期モニタリング」は、当然、今後世界各地の海域において精力的に展開されなくてはならないが、明確な答えを得るためには長期の時間を要する。我々はこれに代わり、過去の溶存有機物プールの大きさの長期的変動を間接的に知るための、何らかのプロキシを開発する必要

があるだろう。

4) 陸起源物質のキャリアとしての溶存有機物の評価

微量元素の生物利用性は、その宿主(すなわち有機リガンド)である溶存有機物の動態と密接に関わっている(3.1.3 参照)。同様に、河川から海洋へ流入する陸起源の微量元素も、溶存有機物がそれらのキャリアとして重要な役割を果たしているものと考えられているが(Krachler *et al.*, 2012)、その実態はまだ十分わかっていない。

一方、大河川の集水域では、活発な人間活動が営まれ、重金属や有機汚染物質、あるいは放射性同位元素などの様々な人為起源物質が排出され、河川を通じて海洋へ輸送されている。このうち溶存態の一部は、単体の化合物やイオンの状態だけでなく、河川水中に存在する溶存有機物と何らかの物理化学的な作用により結合した状態で輸送されることが考えられるが、そのメカニズムについてはほとんどわかっていない。粒子態で運ばれるものの大部分は沿岸域で沈降、除去されるのに対し、溶存態で輸送されるものは、相対的により安定して海洋内部へ運ばれる可能性が高い。汚染物質の海洋への輸送、拡散メカニズムに、天然の溶存有機物がキャリアとして関与している可能性は十分考えられ、有機汚染物質、重金属等の研究分野と連携し、新たな研究領域が開拓されることも期待される。

3.2 微量元素

クリーン技術と分析技術の進歩に伴い、海水中の微量元素に関する知見は近年飛躍的に増大した。この技術的な進歩に支えられ、海水中の微量元素のグローバルな分布を解明すべく、国際 GEOTRACES 計画が世界的に進められている。GEOTRACES で得られた成果は今後の海洋学の発展に大きく寄与すると予想される。では GEOTRACES 後の海洋微量元素研究はどのようなテーマに重点が置かれていくだろうか？ 現時点では明確な方向性は打ち出されていないが、「微量元素元素の存在状態とその生物利用性」と「人為起源物質の海洋への放出とその行方」という二つのテーマは、海洋微量元素研究の主要な課題となるであろう。

3.2.1 海洋における微量金属元素の存在状態とその生物利用性解明

海水中の鉄をはじめとする金属（銅，亜鉛，コバルト，ニッケルなど）の，生物に対する必須栄養素としての役割は徐々に解明されつつある（たとえば，Morel *et al.*, 2003）。今後も微量金属元素の供給・除去過程，生態系への影響に関する研究は継続されていくであろう。これらの知見は主に微量金属元素の全濃度をもとに得られている。しかし，海水中に存在する金属元素は，その存在状態によって海洋における挙動が異なる可能性が指摘されている。例えば，海水中の鉄の大部分は，有機錯体として溶存している（Gledhill and van den Berg, 1994; Rue and Bruland, 1995）。この有機錯体を形成した鉄のすべてを生物が利用できるとは限らない。また，有機錯体となった鉄は粒子による吸着除去作用を受けにくいと考えられている（Johnson *et al.*, 1997）。海洋における鉄の分布を再現するモデルにおいても，このような仮定を置いた方が分布を良く説明できるという結果が示された（Misumi *et al.*, 2011）。鉄以外にも，銅・亜鉛・コバルトなどは，海水中では大部分が有機錯体であると言われている（Coale and Bruland, 1988; Bruland, 1989; Ellwood and van den Berg, 2001; Saito and Moffett, 2001）。さらに，鉄の場合は，コロイド態も海水中に多く存在する（Nishioka *et al.*, 2001; Bergquist *et al.*, 2007）。このように，海水中の微量金属元素の存在状態は複雑であり，未だその全貌は把握されていない。海洋における微量金属元素の役割を解明するためには，存在状態に関する研究を進める必要がある。

微量金属元素の存在状態に関する研究が十分進んでいない原因は，その技術的な困難さに起因している。海水中の nM から pM という微量の金属元素について，操作中の形態変化を起こすことなく，存在状態別に定量することは極めて難しい。例えば，海水中の金属有機錯体に対して適用できる手法は，競争配位子を用いるカソーディックストリッピングボルタンメトリーやアノードックストリッピングボルタンメトリーなど一部の電気化学的手法に限られており，現在も主流となっている。近年，疑似ポーラログラフ法（Baar and Croot, 2011），Reverse Titration 法（Nuester and van den Berg, 2005）

などの新しい方法が提案されており，従来の方法と組み合わせることによって多角的に研究を推進することが可能になりつつある。今後は，陸水の研究で用いられている手法（DGT 法，PML 法など，Sigg *et al.*, 2006）も海洋へ適用すべきである。また，有機物に対する非破壊型の質量分析法が格段に進歩したため，有機配位子の分子量や構造に関する詳しい知見が得られると期待される。一方，これまであまり注目されていなかった微量の無機配位子（フッ化物イオン，リン酸イオン，硫化物イオン，ケイ酸など）と微量金属元素との錯作成（Byrne, 1996）についても，新しい技術を取り入れることによって検討していく必要がある。

新しい技術を開発し，海水中の微量金属元素の存在状態に関する知見を深めるための研究を推進すべきである。この存在状態に関する研究では，状態が変化する前に試料を処理・分析する必要がある，大型研究船の実験室の利用が不可欠である。さらに，化学系の他分野との交流を深めると共に，最新の分析機器の導入も積極的に進める必要がある。

3.2.2 人為起源物質の海洋への放出とその行方

先端技術の発展に伴い様々な素材が工業的に開発・利用されており，海洋に放出される人為起源物質の組成・量は年々変化している。これまで，外洋域において人為的な影響が最も顕著に現れるのは海水中の鉛であると考えられてきた。アメリカの Patterson らは，アイスコアや海水を分析してその濃度変化を調べ，鉛の広範囲な人為的汚染を明らかにしてきた（例えば，Murozumi *et al.*, 1969; Schaule and Patterson, 1981）。近年の研究では，鉛以外の元素，水銀（Hg）や白金族元素（特にオスミウム [Os]）についても，人為的な影響が海洋に現れていると指摘されている（Hg, Sunderland *et al.*, 2009; Os, Chen *et al.*, 2009）。特に西部北太平洋は東アジアの経済的発展に伴い，人為起源物質の影響を受けやすい海域となっている。今後の海洋環境の変化を常に注視していくためには，同じ海域での定期的観測による学術研究が不可欠である。また，海水中の濃度変化だけでなく，人為起源微量元素の供給過程や海洋内部での循環過程も解明していく必要がある。この目的に対して，微

量元素同位体の精密分析は特に有望な研究手段になると期待される。これまで、鉛同位体の精密分析により、鉛の起源とその供給過程を明らかにしようという研究が行われてきた(Veron *et al.*, 1993 など)。鉛以外の金属についても、鉱物から金属を取り出して精錬し、工業製品に加工するまでの過程で様々な化学操作を経る。その過程で大きな分別が生じ、天然とは大きく異なった同位体組成を持つ金属が精製される可能性がある。海水中の微量金属元素の同位体比を測定すれば、供給源から海洋に到達するまでの過程を追跡できると期待される。このような研究は、多重検出器型誘導結合プラズマ質量分析法(MC-ICPMS)が開発されて初めて可能となった。新しい分析技術を用いて、微量元素の新たなトレーサーを開発することも今後の研究の大きな課題である。

クリーン実験設備を持つ大型研究観測船を使って定点における定期的な学術研究を長期にわたり継続すること、最新の分析機器を導入して新しい技術開発を行うことにより、海洋環境の変化をいち早く捉え、その対策を講じる体制を構築することが必要になる。

3.3 プロセスの発生頻度観測

海洋中の物質循環は、あるリザーバー間の物質の移動を実現する生物地球化学的なプロセスが一つしかないという場合は非常にまれであり、「リザーバー」の取り方にもよるが)殆どの場合は複数のプロセスが並行して存在している。例えば外洋域において海水から「植物プランクトン群集」へ生元素を輸送する過程は、子細に見れば個々の植物プランクトン種(あるいはグループ)が異なる炭素・窒素比の輸送プロセスを並行して発現する事によって実現されている。更にはケイ藻の場合のように、同じ植物グループであっても鉄濃度、pH等の環境変数によって異なる炭素・窒素比の輸送プロセスを発現する場合もある(Takeda, 1998; Sugie and Yoshimura, 2013)。こうした複数のプロセスの併存によって実現されている物質輸送を理解する方法として、我々は当初、「海水」・「植物プランクトン」という二つのリザーバー間に巨視的な単一の輸送プロセスを仮定し、このプロセスの実現する物質毎の輸送速度を水温、塩分、(鉄を含む)栄養塩濃度等の変数でパラメタライズする手法を用

いてきた(物質循環モデルで言えばEPZDモデルに相当)。それがここ20年ほどの生物地球化学的な分析技術の進展により、実際に「海水」・「植物プランクトン」間に存在する複数の物質輸送プロセスを「少なくとも瞬間的には」解像する事が可能になった。これにより、例えば植物プランクトン群集のサイズ画分毎に輸送する炭素・窒素比が異なる事(たとえば, Ishida *et al.*, 2009)や、窒素制限下と鉄制限下でケイ藻の輸送する炭素・窒素比が異なること(たとえば, Aramaki *et al.*, 2009)が観測的に理解されるようになった。こうした「プロセスの解像度」の高度化は、観測データの時空間密度の高度化と同様に、ここ20年ほどの物質循環研究の大きな進展である。

次の段階として、我々はこのように並行して存在する複数の物質輸送プロセスが、どのような環境においてどのような比率で発生するのかを理解する必要がある。実は、この「海洋中におけるあるプロセスの発生頻度」を直接観測的に証明した研究は未だ存在していない。現状では、モデル上で複数の物質輸送プロセスを明示的に解像し(これは具体的には、従来単一のリザーバーとして扱ってきたものを複数のリザーバーに分解し、個々のリザーバーに対して単一の輸送プロセスを仮定する事で実現されている。従って実際にはモデル上で解像されているのは「リザーバー」の方であり、一つのリザーバーには一つの輸送過程しか対応していないという点では従来のEPZDモデルと同質である)、それらの過程に係わる物質の濃度の時空間変動のデータから、物質循環モデル上で逆算して「この海域(あるいはこの年)ではこのプロセスが優先した筈である」といった推定が行われている(例えば海洋上の主要栄養塩と溶存鉄の分布から海域別に鉄制限の発生頻度を推定したAumont *et al.* [2003]の例がある)。しかしこのような推定ではモデル上で物質輸送がどのように関数化されているかによって結果が大きく左右され、現実にマッチした推定結果であるか否かは結局観測で確かめる必要がある。また現在のモデルでは、物質輸送プロセスを並列化するためには従来単一であったリザーバーを仮想的に複数に分画する必要があるが、この分割されたリザーバーが実際にどのような観測値に対応するものかは必ずしも自明でない場合もある。例えば標準的なNEMUROモデル(Kishi *et*

al., 2007) では植物プランクトンをサイズ別に2段階に分割しているが、実際にはこれは「機能の異なる2つの群集」に分けているだけなので、ある具体的なプランクトンが機能上どのリザーバーに属しているかを体サイズで一意的に決定することは厳密には不可能である。

物質輸送プロセスの高解像度化(あるいは複数並列化)を確実に進展させるためには、従って、直接のプロセス観測によって「あるプロセスの海洋上での発生頻度」の評価を行っていく必要がある。これは例えば複数の観測プラットフォームによってあるプロセスが発生しているか否かを多数点でシノプティックに観測し、そのプロセスの発生頻度を直接にもとめるような、いわば「プロセスのモニタリングシステム」を構築する必要があるという事である。このような「発生頻度観測」は調査船による観測でも不可能では無いが(例えば春期親潮域における鉄制限の発生頻度を、1隻の調査船で観測したSPINUPクルーズ[Nishioka *et al.*, 2007]), 安定的にこのような観測を実施していくためには、個々のプロセスが発生した際に特異的に発生する物質や生物の生理状態(「プロセスのトレーサー」)を観測する技術を開発する方が近道であろうと思われる。例えば窒素固定・脱窒プロセスの発生頻度のトレーサーとしては N^* が使用可能であり(たとえば, Watanabe *et al.*, 2008), これは窒素濃度とリン酸濃度の双方がセンサー観測可能になれば、2.1節および2.2節で議論されたような無人観測システムによって全球的なリアルタイムモニタリングが可能となる。鉄制限についてはVOS観測等でフラボドキシニン/フェロドキシニン比(たとえば, Hattori-Saito *et al.*, 2010)の試料採取と分析を恒常的に実施できれば発生頻度のモニタリングを行える可能性が有る。その他のプロセスについても同様のトレーサー開発を行う事によって、そのトレーサーを用いた「プロセスの発生頻度のモニタリング」が順次可能となっていくと期待される。

3.4 鉛直構造

海洋学は鉛直1次元の解析からスタートしたとも言えるが、物質循環について3次元の空間的把握、4次元の時空間的把握が問われている中で、あえてここで鉛直構造を論ずることに疑義のある向きもあろう。だが、海洋

の物質循環研究で最大のトピックは、沈降粒子による鉛直的な物質輸送であったことを今一度思い起こす必要がある。海洋は、鉛直方向数m~数十mの環境傾度が水平方向数百kmのそれを超える、特異な場である。鉛直方向のごく近接した水が「隔絶」している中で、粒子は数日の時間スケールで、数百年以上の時間スケールの差異を超えて移動するのである。3次元的な理解が進む中で、粒子の沈降だけでなく溶存物質の交換・移送においても、鉛直方向の「近さ」が今一度問われてもよい。

3.4.1 亜熱帯海域における栄養塩の鉛直供給プロセス

亜熱帯成層海域で出現する溶存酸素の季節的過飽和層は、栄養塩躍層よりかなり上にあるとする観測結果がある(Hayward, 1994)。高感度分析で得られている栄養塩躍層上端の濃度勾配は非常にシャープで、上端以浅へ栄養塩が継続的に供給されている痕跡は見えない(Kanda *et al.*, 2007)。リン酸と硝酸の濃度躍層のわずかなずれを考慮したとしても、溶存酸素の季節的過飽和層には下層から窒素とリンの両方が到達できない可能性が高い。以上が正しいとすれば、亜表層からの栄養塩が届かない層で新生産が駆動されていることになる(3.4.3参照)が、窒素のみの供給である窒素固定ではこの説明は困難である(3.4.2参照)。中規模渦、台風などの非正常の現象に伴う供給(McGillicuddy *et al.*, 1997)や、生物移動に伴う輸送(Longhurst *et al.*, 1989; Villareal *et al.*, 1999), あるいは大気経由での供給(3.4.2参照)が仮定されることが多いが、定量的な検証により決着を見たとは言い難い。窒素・リンの両方について、栄養塩の鉛直輸送プロセスにはまだ未解明な部分がある。

3.4.2 窒素固定へのリン・鉄の供給源の解明

近年、化学的・生物的手法による大洋規模での窒素固定量の見直しが行われ、窒素固定量が従来考えられていたよりも大きく、海洋における物質循環や生物に重要なプロセスであることが明らかになった。今後加速すると考えられる温暖化による水温上昇や海洋酸性化は窒素固定をさらに増大させると言われているが、同時に窒素固

定の制限要因であるリンと鉄の供給も変化させる可能性がある。このため、窒素固定の将来予測のためには、窒素固定生物の種類・生態や分布の解明に加えて、それぞれの種や海域へのリン・鉄の供給源を定量的に理解することが必要である。

例えば、*Trichodesmium* は溶存有機態リンの利用が可能であり、また、浮力調整による鉛直移動を行い下層の栄養塩を取り込んでいる可能性があるが、どちらも定量的情報は少なく、将来予想をする段階には至っていない (Zehr, 2011)。大気エアロゾルによる鉄の供給は知られているが、リンの供給源としてはあまり重要ではないと考えられている (Okin *et al.*, 2011)。しかし、エアロゾルに含まれる有機物由来の易溶性リンの供給量や経路、大気中の SO_2 や NO_x による鉱物由来のリンの海洋への溶解量の増加 (Nenes *et al.*, 2011) などに関する情報は不足しており、海域によっては重要なリン源になっている可能性もある。中規模渦などの局所的イベントが窒素固定を活性化するという報告もあるが (Church *et al.*, 2009)、メカニズムの解明には更なる研究が求められている (Sohm *et al.*, 2011)。脱窒などにより窒素に対してリンが過剰になった海水の移流により、他の海域の窒素固定にリンが供給されているという指摘もある (Palter *et al.*, 2011)。太平洋でも、オホーツク海などの縁辺海の沿岸で脱窒を受けた水の水平輸送が北西太平洋亜熱帯域での窒素固定にリンや鉄を供給している可能性が考えられる。このプロセスにおいては、物理的な海水輸送過程に加えて、上流域での脱窒過程の変化を解明・予測することも重要である。

3.4.3 トワイライトゾーンの物質収支

1) トワイライトゾーンにおける沈降粒子の挙動

生物活動を介した物質循環過程の観測研究は、表層域 (水深 100/200 m 以浅) では動物・植物プランクトンの現存量や一次生産力等に関して、海洋観測船あるいは人工衛星により実施されてきた。また流体力学的擾乱が小さく生物量が少ない深層域 (水深 1000 m 以深) では、時系列式セディメントトラップにより沈降粒子のフラックス・化学組成に関する時系列観測研究が実施されてきた。これに対して海洋の中層 (表層混合層直下から深層

直上: 水深約 100/200 m~1000 m)、いわゆる「トワイライトゾーン」と呼ばれる層における物質循環過程については、その重要性が指摘されてきたにもかかわらず、未だに十分な観測が実施されていない。その中で、沈降粒子の挙動に関しては以下の点がオープンクエッションのままである。

輸出生産力・率: 表層からトワイライトゾーンへ輸送される有機炭素フラックス (輸出生産力) と有光層における一次生産力に対するその割合 (輸出生産率) が、一次生産力、植物プランクトン優占種、動物プランクトン捕食圧、水温 (= 微生物活性) 等どの因子により主に制御されるのか? そして現在進行中の環境ストレス (温暖化、酸性化等) によりそれらの制御能力がどのように変化するのか? を明らかにしていく事が重要である。

鉛直変化率 (沈降粒子の分解過程): トワイライトゾーンにおける沈降粒子の鉛直変化 (水深に伴う沈降粒子量の減少傾向) に関しては「マーチンカーブ」という「べき乗関数」(Martin *et al.*, 1987) で数式化され、多くのモデルに使用されてきたが、近年その見直しが求められている。また鉛直変化の度合い (鉛直変化率) の大小が、海洋表層の植物プランクトン優占種により決定されるのか? 生物起源オパール、炭酸カルシウム、陸起源物質等の錘 (バラスト) で決定されるのか否か (Honda and Watanabe, 2010; Le Moigne *et al.*, 2012)? セディメントトラップで観測された沈降粒子 (有機炭素粒子) の鉛直変化とトワイライトゾーンに生息する動物プランクトン、(その多くは沈降粒子とともに沈降する) バクテリアの炭素要求量と整合性があるのか (Buesseler *et al.*, 2007, 2008)? それらが前述した環境ストレスによりどのように変化するのか? 等引き続き観測研究すべき事は多々ある。加えて、この10年間で強調されている、沈降粒子による受動的な炭素鉛直輸送に対する、動物プランクトンの能動的な炭素輸送 (周年的炭素鉛直輸送、鉛直移動時の呼吸による炭素放出量) の重要性 (Kobari *et al.*, 2008) については未だ結論がでていない。

これらを観測研究するためには2節で紹介された「バイオ」プロファイリングフロート (酸素センサー、蛍光光度計、後方散乱計付プロファイリングフロート)、「バイオ」グライダー、そして中性浮力型あるいは光学式セ

ディメントトラップの導入が強く望まれる。

2) 上部トワイライトゾーンでの溶存物質収支

海洋表層では、赤道域を除くほぼ全海洋で、全炭酸濃度が顕著に季節変化している。夏季における表面付近の全炭酸濃度の減少が、生物生産（と成層化に伴う下層からの全炭酸供給の低下）に起因することは明らかである。しかし、栄養塩が枯渇した亜熱帯域については、夏季の全炭酸濃度減少を引き起こす生物生産性を維持するメカニズムは解明されておらず、海洋物質循環の重要な課題のひとつとなっている。

一方、冬季の表面水における全炭酸濃度や栄養塩濃度の増加についても、議論は尽くされていない。冬季の鉛直混合によって引き起こされる海洋表面付近の全炭酸濃度や栄養塩濃度の上昇は、上部トワイライトゾーン（夏季混合層の底より深く、冬季混合層の底より浅い層）における、全炭酸や栄養塩の季節変化に依存している。上部トワイライトゾーンと、より浅い層で生成された沈降・懸濁態有機物粒子と準易分解性の溶存態有機物の分解や、下層からの（たとえば亜熱帯モード水からの）鉛直的な供給が、上部トワイライトゾーン的全炭酸濃度や栄養塩濃度の季節変化にどう寄与しているのか、これに亜表層の移流や渦の通過はどう影響しているのか、といった問題については、未だに定量的な回答が得られていない。

海水温上昇や気候変動は、上部トワイライトゾーンの物質循環を長期に変化させ、海洋表層への全炭酸と栄養塩の供給に重大な影響を及ぼす可能性がある。また、大気CO₂濃度の増加によって海洋表層のpCO₂が高くなる将来は、全炭酸濃度や水温の変化に対して、pCO₂が現在よりも鋭敏に変化する。このため上部トワイライトゾーンの物質循環の変化は、表面付近との相互作用を通じて、大気・海洋間のCO₂フラックスや海洋酸性化の動向に影響を及ぼす可能性がある。バイオプロファイリングフロートやバイオグライダーによる観測で、物理環境や物質濃度の変動を高時間・空間解像度で観測するとともに、研究船による集中的な観測によって、上部トワイライトゾーンとその近接層における生物地球化学的プロセスとその長期トレンドの解明を図ることが重要である。

3.4.4 微生物炭素ポンプ

大気中のCO₂ガスが海洋に吸収されるメカニズムには、物理的な溶解ポンプ、化学的なアルカリポンプ、そして生物ポンプが知られているが、特に生物ポンプについては、前者の二つに比べ、それを制御するパラメータやしくみが複雑であり、温暖化の将来予測の不確定要因の一つともなっている。

一方、生物ポンプが、有光層内の一次生産を起点とする生物起源粒子の鉛直輸送によって行われるのに対し、海洋の生物群集が関与するもう一つの炭素吸収固定メカニズムの概念、Microbial Carbon Pump（微生物炭素ポンプ）と呼ばれるメカニズム（Jiao *et al.*, 2010）が、近年、注目を集めている。これは、海洋の一次生産によって供給された有機物が微生物群集によって利用される過程において、その一部が難分解な有機物に変換され、その結果、炭素が海洋内部に長期間安定に固定されるというメカニズムである。海洋には、地球表層圏内では土壌有機物に次いで大きな有機炭素の貯蔵庫である、溶存有機炭素（Dissolved Organic Carbon : DOC）のプールの存在が知られており、その現存量は大気中のCO₂ガスの炭素量にほぼ匹敵する700 pgC程度に上るものと推定されている。その大部分は生分解に対し極めて安定で、難分解な性質を有することが知られており、その年齢は最長で6,000年にも達することが¹⁴C年代測定の研究から明らかになっている。すなわち、この不動で巨大なDOCプールが、究極的な微生物炭素ポンプの行先と考えられている。

現在、上述したCO₂の吸収ポンプの働きによって、大気中のCO₂ガス濃度の上昇が緩衝されている一方で、海水が次第に酸性化し、アルカリポンプの弱体化と共に、炭酸カルシウム殻をもつ生物を中心に生態系への影響が懸念されている。これに対し、微生物炭素ポンプは、長期間にわたりCO₂に回帰しない炭素プールを意味し、酸性化に結びつかない質の高いCO₂の吸収固定プロセスと言える。しかし、その具体的なメカニズムはほとんどブラックボックスのままとなっており、今後、プロセス解明に精力的に取り組む必要がある。特に、微生物炭素ポンプの概念が生まれた背景として、近年の日本人による多くの研究成果が影響を及ぼしている（Tanoue *et*

al., 1995; Ogawa *et al.*, 2001; Yamashita and Tanoue, 2008)。当該研究テーマの進展に当たっては、是非日本人研究者がイニシアチブをとっていくべきであろう。

3.5 プロセス研究における分析化学の成果適用

本節では、物質循環における未解明のプロセスについて述べてきた。最後に、若干異なる視点ではあるが、分析化学との関係について述べる。海洋の化学的研究は、ある部分では分析化学と表裏一体であった。元素や化合物の定量分析によって海洋における物質の分布を明らかにしたことは、海洋の物質循環研究の原点である。本報告書は、このような定量分析のセンサー化によるハイビジョン観測を中心に取り上げているが、他方で分析化学の伝統的な方向である分析精度・確度の追求が意味を失っているわけではない。2.1.2で触れたように、炭酸系分析の精緻化はプロセス研究としても大きな意義がある。定量分析がより高い精度・確度を実現することで、新しいプロセスの解明に結びつく可能性は大いにある。研究業績としての評価がされにくい部分はあるが、定量分析の技術力を高めるための分析手法の自動化や標準物質の作成・管理などとそれを保証するための体制の確保は重要である。

他方、分析化学自体も機器分析を中心に著しい進歩を遂げつつある。新しい分析手法の導入が新しいプロセスの解明につながった例は、本報告書中にも多く示されている。これまで触れていない例としては、揮発性炭化水素類の分子別同時定量を実現するプロトン移動反応質量分析計 (PTR-MS) がある。PTR-MSは、元々は大気科学分野で開発されたが (例えば, de Gouw and Warneke, 2007), 近年になって海洋科学でも成果を挙げつつある (Kameyama *et al.*, 2009, 2010)。個別の揮発性炭化水素類の海水中における挙動は、これまで全くと言ってよいほど解明されていないことから、こうした分析技術が未解明のプロセス研究につながる事が期待されよう。

近年の分析化学が大きく進展した領域の一つに、同位体化学分野がある。軽元素 (炭素, 水素, 窒素, 酸素, 硫黄など) の安定同位体比分析は、従来から海洋学にも大きく貢献してきたが、最新の同位体分析の海洋学への

導入例として、三酸素同位体比指標があげられる。安定同位体比のバルクの定量では、起源の異なる (=同位体比が異なる) 分子の混合による同位体比の変化と、動的同位体分別過程の介在による同位体比の変化を区別できないことから、同位体比データの解釈が困難な場合も多かった。これに対して三酸素同位体比指標は、酸素の三種の酸素安定同位体比の相対変化を巧妙に利用して動的同位体分別過程による変化をキャンセルした指標である。例えば、海洋の溶存酸素分子の三酸素同位体比指標から大気由来の酸素と光合成由来の酸素の混合比を高精度で求めることが出来るため、総一次生産量 (Luz and Barkan, 2000) や大気-海洋間のガス交換係数 (Sarma *et al.*, 2010) の算出に適用できる。また、溶存硝酸イオンの三酸素同位体比指標も、大気沈着由来の硝酸イオンと硝化由来の硝酸イオンの混合比の指標として利用可能で、陸水分野での応用例 (Tsunogai *et al.*, 2011) は、海洋でも十分応用可能と考えられる。三種以上の安定同位体から成り立つ原子であれば、酸素以外の原子にも応用出来る可能性があり、硫黄の四種の安定同位体比を物質循環指標として利用する試みも既に始まっている。

以上のような分析化学の成果導入はもちろんであるが、分析化学の発展に海洋学者が積極的に貢献する中で、海洋物質循環のプロセス研究にも寄与できると考えられる。

4. 物質循環の統合的理解

4.1 ハイビジョン観測とプロセス研究の統合

2節および3節で概観してきたハイビジョン観測とプロセス研究は、相互に補完しながら物質循環の統合的な理解を進める大きな2本の柱と位置づけられる。プロセス研究の成果から新たな観測パラメータが提案されてハイビジョン観測を高度化し、ハイビジョン観測の結果が新たに解明すべきプロセスを浮き彫りにしていくことを期待している。モデルについては、プロセス自体に未解明な部分が残されている以上、仮に適切なバリデーション観測を併用したとしてもハイビジョン観測を代替できるものではない。しかしプロセス研究の成果を随時取り込み、またハイビジョン観測データによって随時検証していくことで、プロセス研究とハイビジョン観測のなか

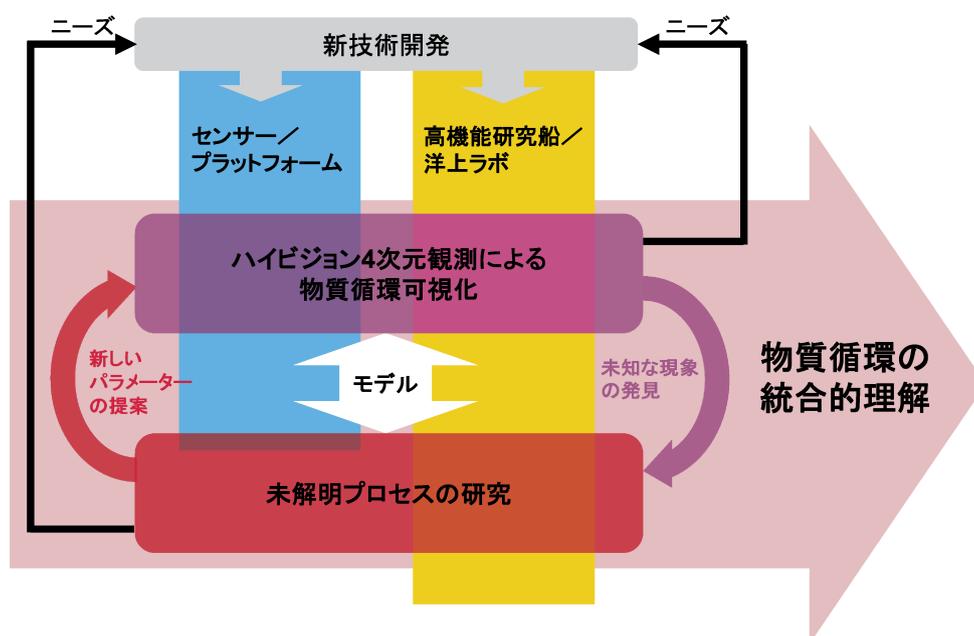


Fig. 1. A schematic diagram showing postulated interactions between the “hi-vision” (or high-definition image) observations and the process studies, including roles of modeling and technological innovations (based on discussions among the subgroup).

だちとして、物質循環の統合的な理解を進める上で、重要な機能を果たすことが期待される。

ハイビジョン観測は、リアルタイムで化学系（生物系）の項目を計測できる様々なセンサーと、そのセンサーを搭載する無人のフロートや係留系などの研究船・観測船以外のプラットフォームが主要な部分を担うことになる（2節参照）。ハイビジョン観測におけるプラットフォームの展開・回収作業や、センサーのバリデーション観測には船舶を用いる必要があるのはいうまでもないが、条件を満たせば航空機（飛行艇含む）の使用が可能な場合も考えられる。プロセス研究のプラットフォームは、船舶が中心となる。プロセス研究は、データをもとに新たな仮説を立て、その検証のための観測や洋上実験を繰り返す「実験室」的な研究展開をしていく。あらかじめ計画された必要最小限の研究施設・測定機器を航海ごとに搭載していく従来型の研究船ではなく、洋上で誕生する新たな仮説に対し、現場で検証のための観測や実験を計画・実施できる、いわば洋上ラボの機能を備えた次世代型の高機能研究船が望ましい。プロセス研究とハイビジョ

ン観測が密接に連携しながら研究を展開していくためには、高機能研究船にはハイビジョン観測の司令塔としての機能も求められる。無人プラットフォームからリアルタイムで供給されてくる膨大な量のデータを処理し、その解析結果を船上のプロセス研究の現場に反映させる機能を持つことが望ましい。また、ハイビジョン観測やプロセス研究の進行に合わせて、ハイビジョン観測プラットフォームの展開をコントロールしていく機能も望まれる。なお、我が国には独自といえる大型飛行艇（現在の海上自衛隊救難飛行艇 US-2）の技術がある（植松ら、2003）。現状では、離着水時の海況が限定されることや積載可能重量が小さいこともあって、船舶の代替として海洋研究の現場で利用されるには至っていない。ハイビジョン観測、プロセス研究を問わず、飛行艇の優位が生かせる研究用途においては、将来の海洋研究プラットフォームとして期待できよう。このような研究方向を支える鍵になるのが技術開発であろう。化学系パラメータのハイビジョン観測はセンサーとプラットフォームの両面の技術開発無しには展開し得ない。高機能研究船によるプロ

セス研究もまた絶えず新しい技術や研究手法を取り入れることで革新的な展開をしていくことが可能になる。ハイビジョン観測とプロセス研究の双方から技術開発のニーズが提示され、新たな技術開発がセンサー／プラットフォームと船上での研究に投入されるサイクルの確立が求められる。

以上をまとめた概念図 (Fig. 1) を示す。また、以下にこの様な研究の展開を想定する海域を例示する。

4.2 ターゲット海域の例

ターゲットとなるべき海域として、ワーキンググループでは人間活動の影響が顕在化している海域を取り上げるべきであるという議論があった。人間活動が地球環境に及ぼす影響は、海洋においても様々な形であらわれている。このような現象は、人口が密集し経済活動が活発な地域の周辺で、特に顕著に見られると予想される。ここでは、ワーキンググループでの議論に沿って我が国および東アジアに近い「西部北太平洋およびその縁辺海」とインド亜大陸に近い「ベンガル湾」を取り上げた。また、人間活動の影響を最も強く受ける、より広い一般的な区分としての「沿岸域」についても、物理サブグループで議論が行われたことから (岡ら, 2013)、ターゲットとして取り上げてみた。各海域の特徴と推進すべき研究課題を例示する。

4.2.1 西部北太平洋およびその縁辺海

西部北太平洋は、大河川である黄河、揚子江、アムール川とともに、ベーリング海・オホーツク海・日本海・東シナ海・南シナ海など多くの縁辺海に接している。西部北太平洋には、これらの大河川・縁辺海を經由して陸起源物質・炭素・栄養塩物質が供給されている (Liu *et al.*, 2010)。例えば、オホーツク海から供給された高濃度の鉄は、北太平洋中層水 (NPIW) 中の鉄濃度上昇に寄与していると考えられる (Nishioka *et al.*, 2007)。加えて、縁辺海は温暖化・陸域変化・人為的攪乱などの環境変化の影響を受けやすい海域である。例えば、日本海の深層水では温暖化の影響による溶存酸素濃度の減少が報告されている (Gamo, 1999, 2011)。このような縁

辺海の変化は、西部北太平洋への様々な物質の供給過程にも影響を及ぼす可能性がある。全球的な海洋における物質循環の変化をいち早く検出するためには、西部北太平洋ならびに縁辺海における継続的かつ集中した学術調査を実施する必要がある。

また、西部北太平洋においては、偏西風に乗って風上にあるアジア大陸から粘土鉱物や人為起源物質が風送塵として大量に降下してくる (Uematsu *et al.*, 2003)。例えば、海水中の鉛は大気を經由して外洋に運ばれる人為起源物質の代表として有名である (Boyle, 2001) が、北大西洋においては有鉛ガソリンの使用が禁止されてから海水中の鉛濃度は減少し続け、1970年代から1990年代にかけて5-6分の1程度に低下している (Lee *et al.*, 2011)。これに対して、ハワイ沖の表層海水中の鉛濃度は2分の1程度までしか減少していない (Boyle *et al.*, 2005)。この違いは、アジア地域の発展と大きく関わっていることは否定できない。今後も大きな経済の発展と人工増加が見込まれるアジア地域では多量の人為起源物質が放出され、西部北太平洋に降下することが予想される。西部北太平洋は人為起源物質の影響を受けやすい海域であり、環境変化が鋭敏に現れる。継続的な学術研究を行い、その変化を常に注視すべきである。

4.2.2 ベンガル湾

様々な時間スケールの気候フォーシングに応じた海洋環境の変化によって生態系構造 (生物多様性) は変化する。その結果、機能的生物多様性 (functional biodiversity) が変化し、それが表層から深層に輸送される物質フラックスに影響を与え、結果として地球環境へとフィードバックしていくであろう。従って自然的・人為的外的強制力 (フォーシング) の変化による海洋生態系を介した物質循環過程の変化を把握し、地球環境変動予測に資することが急務である。

インド洋東部のベンガル湾はインドモンスーン (季節風) の変化、それに連動した河川水流入量や風送塵供給量の変化により海洋物理学の特徴 (海流、鉛直混合)、海洋化学の特徴 (栄養塩濃度、懸濁物量) が大きく変化する海域である。また世界第二位の人口を持つインドを筆頭に周辺諸国を合わせると世界人口の約20%がベン

ガル湾周辺に密集しているため人類活動の結果生じる海洋酸性化や富栄養化、貧酸素化の影響を受けやすい海域と考えられる。さらに地球温暖化に伴う海水温上昇率が高い海域でもある。従って同海域をモデル海域とすることで外的フォーシングと海洋変化のメカニズムを理解することにより現実的な地球環境の将来予測が可能となると考えられる (Wiggert *et al.*, 2009)。

そこでベンガル湾外洋域の南北方向複数点に時系列観測定点を設定し、セディメントトラップや水中ウインチで自動昇降する FRRF を搭載した係留系および観測船による総合的な生物・化学・物理学的時系列観測研究を複数年にわたって実施するような研究が考えられる。

ベンガル湾には米国やインド等により既に多くの表層ブイが展開され主に海洋気象・海洋物理学的観測ネットワークが構築されている。それは同海域のみならず世界の熱収支・気象に大きく影響するインド洋ダイポールモード現象 (IOD) やマッデンジュリアン変動 (MJO) 等の海洋物理変動、気象変動が発生するからである。これら既存のブイの活用、数値シミュレーション解析を組み合わせることで、海洋の生物地球化学に大きな影響を与える海洋物理学的・海洋気象学的环境状況に関する情報を有効活用でき、全ての分野へのシナジー効果が期待できる。

国際的には CLIVAR (Climate Variability and Predictability) および IO-GOOS (Indian Ocean Global Ocean Observing System) の下のインド洋パネル (IOP) が国際協力によりインド洋の観測ブイ網を構築、海洋物理学的・海洋気象学的観測が実施されてきたが、IMBER (Integrated Marine Biogeochemistry and Ecosystem Research) 等から同海域の生物地球化学的観測の重要性が指摘されてきた。そのために組織されたのが SIBER (Sustained Indian Ocean Biogeochemistry and Ecosystem Research) である (INCOIS, 2013)。2007 年にサイエンスプランが提案され 2010 年以降にインドの沿岸域を中心とした生物地球化学的観測研究が実施され始めた。しかし外洋域での同観測研究は実施されてこなかった。そのため SIBER では 2013 年 (平成 25 年) 以降の数年間にインド洋での集中観測 (ワールドキャンペーン) を検討中である。

以上をまとめると、ベンガル湾は以下の点でホットス

ポットであり、今後の重点研究対象海域ということがができる。

- ・大気-海洋相互作用 (モンスーン, インド洋ダイポール現象, マッデンジュリアン振動による海洋学的変動)
- ・陸域-海洋相互作用 (淡水流入, 大気塵の海洋学への影響)
- ・人間活動-海洋相互作用 (周辺に世界人口の約 1/4 が集まっている海域。人為的物質供給による海洋学的変動)

4.2.3 沿岸

沿岸海域は面積では海洋のわずか 0.2% を占めるに過ぎないが、陸上の森林全体の約半分に匹敵する純炭素吸収能を有し (0.24-0.45 PgC/年), その固定速度は熱帯雨林の 2-11 倍に達するとされている (Nellemann *et al.*, 2009)。国連環境計画 (UNEP) は、沿岸における生物活動に伴う二酸化炭素の吸収・固定を “Blue Carbon” と名付け、陸上の “Green Carbon” と並ぶ重要な炭素循環プロセスの場であると評価している。また沿岸海域は、河口域、藻場、干潟、岩礁帯、サンゴ礁、浅海浮遊生態系、底棲生態系など、種々の地形・生態系が複合的に入り組んで共存し、海洋の生物多様性の保全にも重要な海域である。生物生産性や生物多様性の高さは、沿岸海域の水産資源の供給ポテンシャルが極めて高いことに無縁ではない。

沿岸域は陸域と外洋域 (海洋) の境界に位置している。特に河口域・内湾域は化学的 (塩分等) にも環境が急変する場であり、河川や地下水を通じて沿岸域に運び込まれた物質は単純にそこを通過するのではなく、化学環境の変化に伴う種々のプロセス (凝集・吸脱着等) や活発な生物活動によって著しい影響を受ける。このため「沿岸域は陸から海洋への物質のフィルター」という概念が提唱されてきた (前田, 1991)。しかし、必ずしもフィルターのように物質を濾し取るばかりではなく、そこでは新たな代謝産物が生み出され、ポンプのように外洋に送り出す仕組みも指摘されている。

このような陸から海洋への物質輸送を量的・質的に評価するためには、沿岸海域で生じているプロセスの理解が欠かせない。しかし、沿岸域は上述のように様々な地

形・生態系の複合的なシステムであり、その入れ子具合によって性質は大きく変化する。加えて、沿岸海域は人間活動の影響を最も直接的に受ける場であり、影響の度合いによって全く異なる姿を見せる。さらに、人間活動の影響は“環境負荷”だけではない。都市域に発達した流域下水道システムは、人間活動によって排出された様々な物質を一旦「下水処理」というボックスで変質させた後に自然界に還流しており、そこで見られる物質循環は従来(自然)の姿とは大きく異なると予想される。特に経済発展の著しい東南アジア諸国において、このような傾向はより顕著に表れてくると考えられる。さらに、全球規模の問題として取り上げられる気候変動や海洋酸性化についても、最も顕著な影響が表れるのは沿岸生態系であろうと危惧される。以上を踏まえて、沿岸海域における物質循環の統合的理解には、以下に挙げる研究項目の推進が必要である。

- ・沿岸海域の複合的システム(地形・生態系・人間活動の影響度合い)の類型化
- ・高密度のモニタリング体制の構築(2節)による物質循環過程のハイビジョン化
- ・陸域、外洋域あるいは大気物質循環研究との連携促進
- ・人間域(都市工学、衛生工学)と生物地球化学(物質循環)の融合による都市域での沿岸物質循環像の創出
- ・生物多様性と海洋(水産)資源の持続可能性を支える理想的な物質循環プロセスの解明
- ・種々の環境問題(富栄養化、人工化学物質汚染など)のヒストリカルな知見の統合
- ・地球温暖化および海洋酸性化に関連した沿岸生態系影響の予測と検出手法の開発

沿岸海域の包括的な理解を目的とするこれらの研究の推進には、物理、生物、化学の相互連携による観測・解析手法の適用が不可欠である。さらにマイクロメートルスケール(堆積物-海水境界層)から、100キロスケール(湾~大陸棚)までのシームレスな研究を展開するための方法論についても議論が必要であろう。

4.3 おわりに—研究体制の整備

2.1.12にも述べられているとおり、ハイビジョン観測

は単にセンサーやプラットフォームが手に入れば実施できるようになるものでは決してない。新しいかたちの研究の進め方に見合った研究体制の整備が極めて重要な意味を持つ。ハイビジョン観測では多数のセンサーやプラットフォームを運用することになる。これらの機器を維持し、リアルタイムで流される膨大なデータを管理し解析するための体制が必要である。4.1で述べた高機能研究船とハイビジョン観測のためのプラットフォーム群がハード面のインフラとすれば、それらを運用する組織、人材などソフト面の体制づくりが鍵を握るといえよう。

物質循環研究の学際性に見合った研究体制も必要となる。幸いこの10年ほどの間に、海洋の物質循環研究の現場では、化学系の研究者だけでなく物理系、生物系、モデル関係の研究者も加わり、組織的・学際的に共同研究を行うスタイルが定着してきている。物質循環研究のこうした学際的な取り組みは、例えば福島第一原子力発電所事故により放出された放射性物質の海洋における動態に関する取り組みにも生かされている。このような統合的な研究のための努力を今後も継承・発展させつつ、次世代の研究プラットフォームの展開に対応した新たな海洋研究の体制を考えるべきであろう。

海洋の研究には船舶や観測プラットフォームなど、ハード面のインフラが不可欠である。加えて、洋上での作業に関わる多くの人材を確保する措置も必要になる。個々の研究者が競争的研究資金を得ていく場面で、こうしたインフラや人的体制の整備についても責任を課されるとすれば、海洋分野の研究者は他分野に対して大きなハンディキャップを負うことになる。一方で、海洋に特有なインフラや研究体制の整備が無条件に保証される社会情勢ではない。化学系サブグループの議論でも、残念ながらこうしたハンディキャップが次世代の海洋研究を支える優秀な研究者や研究支援者の確保に影を落とすつつある現状が認識された。海洋国・先進国の研究者集団として、我々には気候変動に関わる国際的観測への貢献や福島原発事故の海洋への影響解明など様々な国際的責任がある。加えて、我が国の将来を考えると、海洋の有効な利用について先導的な役割を果たすことは文字通り国の死活にかかわる社会的要請でもであろう。こうした要請にきちんと応え、海洋研究の未来を担う体制を作っていく責任を我々は共有している。

謝 辞

本報告書の作成にあたっては、以下の方々（敬称略）から貴重なご助言を頂きました：細田滋毅，角皆潤，紀本英志。匿名の査読者からのご助言とあわせ，深く感謝申し上げます。

References

- ACT [Alliance for Coastal Technologies] (2006) : Recent developments in *in situ* nutrient sensors: applications and future directions. *ACT-06-08, UMCES CBL07-048*, 40pp.
- Aizawa, H. Y., Gokita, J. W., Park, Y., Yoshimi, and S. Kurosawa (2006) : Antibody immobilization on functional monolayers using a quartz crystal microbalance. *IEEE Sensors J.*, **6**, 1052–1056.
- Allison, S. D., Y. Chao, J. D. Farrara, S. Hatosy, and A. C. Martiny (2012) : Fine-scale temporal variation in marine extracellular enzymes of coastal southern California. *Front. Microbiol.*, **3**, doi:10.3389/fmicb.2012.00301.
- Aoki, H., A. Kitajima, and H. Tao (2010 *a*) : Electrochemical sensor array chips for multiple gene detection. *Sensor. Mater.*, **22**, Special Issue, 327–336.
- Aoki, H., A. Kitajima, and H. Tao (2010 *b*) : Label-free and 'signal-on' DNA detection using a probe DNA terminated with ferrocene and -cyclodextrin. *Supramol. Sci.*, **22**, 455–460.
- Aramaki, T., Y. Nojiri, and K. Imai (2009) : Behavior of particulate materials during iron fertilization experiments in the western Subarctic Pacific (SEEDS and SEEDS II). *Deep-Sea Res. II*, **56**, 2875–2888.
- Argo Information Center (2013) : <http://wo.jcommops.org/cgi-bin/WebObjects/Argo>.
- Aumont, O., E. Maier-Reimer, S. Blain, and P. Monfray (2003) : An ecosystem model of the global ocean including Fe, Si, P colimitations. *Global Biogeochem. Cycle*, **17**, GB1060, doi:10.1029/2001GB001745.
- Azam, F. (1998) : Microbial control of oceanic carbon flux: The plot thickens. *Science*, **280**, 694–696.
- Baars, O., and P. L. Croot (2011) : The speciation of dissolved zinc in the Atlantic sector of the Southern Ocean. *Deep-Sea Res. II*, **58**, 2720–2732.
- Bauer, J. E. (2002) : Carbon isotopic composition, p. 405–453. In *Biogeochemistry of Marine Dissolved Organic Matter*, edited by Hansell, D. and C. A. Carlson, Academic Press, New York.
- Benner, R. (2011) : Loose ligands and available iron in the ocean. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, **108**, 893–894.
- Bennett, S. A., E. P. Achterberg, D. P. Connelly, P. J. Statham, G. R. Fones, and C. R. German (2008) : The distribution and stabilisation of dissolved Fe in deep-sea hydrothermal plumes. *Earth Planet. Sci. Lett.*, **270**, 157–167.
- Bergquist, B. A., J. Wu, and E. A. Boyle (2007) : Variability in oceanic dissolved iron is dominated by the colloidal fraction. *Geochim. Cosmochim. Acta*, **71**, 2960–2974.
- Bishop, J. K. B., R. E. Davis, and J. T. Sherman (2002) : Robotic observations of dust storm enhancement of carbon biomass in the North Pacific. *Science*, **298**, 817–821.
- Bishop, J. K. B., and T. D. Wood (2009) : Year-round observations of carbon biomass and flux variability in the Southern Ocean. *Global Biogeochem. Cycles*, **23**, GB2019, doi:10.1029/2008GB003206.
- Bishop, J. K. B., T. J. Wood, R. E. Davis, and J. T. Sherman (2004) : Robotic observations of enhanced carbon biomass and export at 55°S during SOFeX. *Science*, **304**, 417–420.
- Boyd, P. W., and M. J. Ellwood (2010) : The biogeochemical cycle of iron in the ocean. *Nature Geosci.*, **3**, 675–682, doi:10.1038/ngeo0964.
- Boyd, P. W., C. S. Law, C. S. Wong, Y. Nojiri, A. Tsuda, M. Levasseur, S. Takeda, R. Rivkin, P. J. Harrison, R. Strzpek, J. Gower, R. M. McKay, E. Abraham, Marineyckuk, J. Barwell-Clarke, W. Crawford, D. Crawford, M. Hale, K. Harada, K. Johnson, H. Kiyosawa, I. Kudo, A. Marchetti, W. Miller, J. Needoba, J. Nishioka, H. Ogawa, J. Page, M. Robert, H. Saito, A. Sastri, N. Sherry, T. Soutar, N. Sutherland, Y. Taira, F. Whitney, S. K. E. Wong, and T. Yoshimura (2004) : The decline and fate of an iron-induced subarctic phytoplankton bloom. *Nature*, **428**, 549–553.
- Boyle, E. A. (2001) : Anthropogenic trace elements in the ocean, p.195–202. In *Encyclopedia of Ocean Sciences*, edited by J. H. Steele, S. A. Thorpe, and K. K. Turekian, Academic Press Inc., London.
- Boyle, E. A. B. A. Bergquist, R. A. Kayser, and N. Mahowald (2005) : Iron, manganese, and lead at Hawaii Ocean Time-series station ALOHA: Temporal variability and intermediate water hydrothermal plume. *Geochim. Cosmochim. Acta*, **69**, 933–952.
- Brix, H., and N. Gruber (2004) : Interannual variability of the upper ocean carbon cycle at station ALOHA near Hawaii. *Global Biogeochem. Cycles*, **18**, GB4019, doi:10.1029/2004GB002245.
- Brooke Ocean (2011) : <http://www.brooke-ocean.com/lopc.html>.
- Brunald, K. W. (1989) : Complexation of zinc by natural organic ligands in the central North Pacific. *Limnol. Oceanogr.*, **34**, 269–285.
- Buesseler, K. O., C. H. Lamborg, P. W. Boyd, P. J. Lam, T. W. Trull, R. R. Bidigare, J. K. B. Bishop, K. L. Casciotti, F. Dehairs, M. Elskens, M. Honda, D. M. Karl, D. A. Siegel, M. W. Silver, D. K. Steinberg, J. Valdes, B. V. Mooy, and S. Wilson (2007) : Revisiting carbon flux through the ocean's twilight zone. *Science*, **316**, 567–570.
- Buesseler, K. O., T. W. Trull, D. K. Steinberg, M. W. Silver, D. A. Siegel, S.-I. Saitoh, C. H. Lamborg, P. J. Lam, D. M. Karl, N. Z. Jiao, M. C. Honda, M. Elskens, F. Dehairs, S. L. Brown, P. W. Boyd, J. K. B. Bishop, and R. R. Bidigare (2008) : VERTIGO (VERTical Transport In the Global Ocean): a study of particle sources and flux attenuation in the North Pacific. *Deep-Sea Res. II*, **55**, 1522–1539.
- Byrne, R. H. (1996) : Specific problems in the measurement and interpretation of complexation phenomena in seawater (technical report). *Pure Appl. Chem.*, **68**, 1639–1656.
- Byrne, R., M. D. DeGrandpre, T. Short, T. R. Martz, L. Merlivat, C. McNeil, and F. Sayles (2010) : Sensors and systems for

- observations of marine CO₂ system variables, doi:10.5270/OceanObs09.cwp.13. In *Proceedings of OceanObs'09: Sustained Ocean Observations and Information for Society, Vol. 2.*, edited by J. Hall, D. E. Harrison, and D. Stammer, ESA Publication WPP-306, Venice, Italy.
- Canadell, J. G., C. Le Quéré, M. R. Raupach, C. B. Field, E. T. Buitenhuis, P. Ciais, T. J. Conway, N. P. Gillett, R. A. Houghton, and G. Marland (2007) : Contributions to accelerating atmospheric CO₂ growth from economic activity, carbon intensity, and efficiency of natural sinks. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, **104**, 18866–18870.
- CDIAC [Carbon Dioxide Information Analysis Center] (2013) : http://cdiac.ornl.gov/oceans/VOS_Program/.
- Checkley, D. M., Jr., R. E. Davis, A. W. Herman, G. A. Jackson, B. Beanlands, and L. A. Regier (2008) : Assessing plankton and other particles in situ with the SOLOPC. *Limnol. Oceanogr.*, **53**, 2123–2136.
- Chen, C., P. N. Sedwick, and M. Sharma (2009) : Anthropogenic osmium in rain and snow reveals global-scale atmospheric contamination. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, **106**, 7724–7728.
- Chen, R. F., and G. B. Gardner (2004) : High-resolution measurements of chromophoric dissolved organic matter in the Mississippi and Atchafalaya River plume regions. *Mar. Chem.*, **89**, 103–125.
- Church, M. J., C. Mahaffey, R. M. Letelier, R. Lukas, L. P. Zehr, and D. M. Karl (2009) : Physical forcing of nitrogen fixation and diazotroph community structure in the North Pacific subtropical gyre. *Global Biogeochem. Cycles*, **23**, GB2020, doi:10.1029/2008GB003418.
- Coale, K. H., and K. W. Bruland (1988) : Copper complexation in the Northeast Pacific. *Limnol. Oceanogr.*, **33**, 1084–1101.
- de Gouw, J. A., and C. Warneke (2007) : Measurements of volatile organic compounds in the Earth's atmosphere using proton-transfer-reaction mass spectrometry. *Mass Spectrom. Rev.*, **26**, 223–257.
- Dickey, T. D., E. C. Itsweire, M. Moline, and M. J. Perry (2008) : Introduction to the Limnology and Oceanography special issue on autonomous and Lagrangian platforms and sensors (ALPS). *Limnol. Oceanogr.*, **53**, 2057–2061.
- Doney, S. C., V. J. Fabry, R. A. Feely, and J. A. Kleypas (2009) : Ocean acidification: the other CO₂ Problem. *Annu. Rev. Mar. Sci.*, **1**, 169–192.
- Dore, J. E. R. Lukas, D. W. Sadler, M. J. Church, and D. M. Karl (2011) : Physical and biogeochemical modulation of ocean acidification in the central North Pacific. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, **106**, 12235–12240.
- Ellwood, M. J., and C. M. G. van den Berg (2001) : Determination of organic complexation of cobalt in seawater by cathodic stripping voltammetry. *Mar. Chem.*, **75**, 33–47.
- Fenchel, T. (2002) : Microbial behavior in a heterogeneous world. *Science*, **296**, 1068–1071.
- Fiedler, B., P. Fietzek, N. Vieira, P. Silva, H. C. Bittig, and A. Körtzinger (2013) : In situ CO₂ and O₂ measurements on a profiling float. *J. Atmos. Oceanic Technol.*, **30**, 112–126.
- Gamo, T. (1999) : Global warming may have slowed down the deep conveyor belt of a marginal sea of the northwestern Pacific: Japan Sea. *Geophys. Res. Lett.*, **26**, 3141–3144.
- Gamo, T. (2011) : Dissolved oxygen in the bottom water of the Sea of Japan as a sensitive alarm for global climate change. *Trends Anal. Chem.*, **30**, 1308–1319.
- Gamo, T., H. Masuda, T. Yamanaka, K. Okamura, J. Ishibashi, E. Nakayama, H. Obata, K. Shitashima, Y. Nishio, H. Hasumoto, M. Watanabe, K. Mitsuzawa, N. Seama, U. Tsunogai, F. Kouzuma, and Y. Sano (2004) : Discovery of a new hydrothermal venting site in the southernmost Mariana Arc: Al-rich hydrothermal plumes and white smoker activity associated with biogenic methane. *Geochem. J.*, **38**, 527–534.
- Gamo, T., E. Nakayama, K. Shitashima, K. Isshiki, H. Obata, K. Okamura, S. Kanayama, T. Oomori, T. Koizumi, S. Matsumoto, and H. Hasumoto (1996) : Hydrothermal plumes at the Rodriguez triple junction, Indian ridge. *Earth Planet. Sci. Lett.*, **142**, 261–270.
- Giraud, W., L. Lesven, J. Joñica, C. Barus, M. Gourdal, D. Thouron, V. Garçon, and M. Comta (2012) : Reagentless and calibrationless silicate measurement in oceanic waters. *Talanta*, **97**, 157–162.
- Gledhill, M., and C. M. G. van den Berg (1994) : Determination of complexation of iron (III) with natural organic complexing ligands in seawater using cathodic stripping voltammetry. *Mar. Chem.*, **47**, 41–54.
- Griffiths, G. [ed.] (2003) : *Technology and Applications of Autonomous Underwater Vehicles*. Taylor & Francis, London, 368pp.
- Gruber, N., S. Doney, S. Emerson, D. Gilbert, T. Kobayashi, A. Kortzinger, G. C. Johnson, K. S. Johnson, S. Riser, and O. Ulloa (2010) : Adding oxygen to Argo: Developing a global in-situ observatory for ocean deoxygenation and biogeochemistry, doi:10.5270/OceanObs09.cwp.39. In *Proceedings of OceanObs'09: Sustained Ocean Observations and Information for Society, Vol. 2*, edited by J. Hall, D. E. Harrison, and D. Stammer, ESA Publication WPP-306, Venice, Italy.
- Guay, C. K. H., and J. K. B. Bishop (2002) : A rapid birefringence method for measuring suspended CaCO₃ concentrations in seawater. *Deep-Sea Res. I*, **49**, 197–210.
- 浜崎恒二, 石坂丞二, 齊藤宏明, 杉崎宏哉, 鈴木光次, 高橋一生, 千葉早苗, 津田敦 (2013) : 海洋学の10年展望(Ⅲ) — 日本海洋学会将来構想委員会生物サブグループの議論から —. *海の研究*, **22**, 253–272.
- Hattori-Saito, A., J. Nishioka, T. Ono, R. M. L. McKay, and K. Suzuki (2010) : Iron deficiency in micro-sized diatoms in the Oyashio region of the western subarctic Pacific during spring. *J. Oceanogr.*, **66**, 105–115.
- Hayase, K., and N. Shonozuka (1995) : Vertical distribution of fluorescent organic matter along with AOU and nutrients in the equatorial Central Pacific. *Mar. Chem.*, **48**, 283–290.
- Hayward, T. L. (1994) : The shallow oxygen maximum layer and primary production. *Deep-Sea Res. I*, **41**, 559–574.
- Hedges, J. I., J. A. Baldock, Y. Gelinas, C. Lee, M. Peterson and S. G. Wakeham (2001) : Evidence for non-selective preservation of organic matter in sinking marine particles. *Nature*, **409**, 801–804.
- Herman, A. W., B. Beanlands, and E. F. Phillips (2004) : The next generation of optical plankton counter: The laser-OPC. *J. Plankton Res.*, **26**, 1135–1145.
- Hernes, P. J., and R. Benner, (2002) : Transport and diagenesis of dissolved and particulate terrigenous organic matter in the North Pacific Ocean. *Deep-Sea Res. I*, **49**, 2119–2132.

- Hernes, P. J., and R. Benner (2006) : Terrigenous organic matter sources and reactivity in the North Atlantic Ocean and a comparison to the Arctic and Pacific oceans. *Mar. Chem.*, **100**, 66–79.
- Honda, M. C., and S. Watanabe (2010) : Importance of biogenic opal as ballast of particulate organic carbon (POC) transport and existence of mineral ballast-associated and residual POC in the Western Pacific Subarctic Gyre. *Geophys. Res. Lett.*, **37**, L02605, doi:10.1029/2009GL041521.
- Hood, E. M., R. Wanninkhof, and L. Merlivat (2001) : Short timescale variations of fCO₂ in a North Atlantic warm-core eddy: Results from the Gas-Ex 98 carbon interface ocean atmosphere (CARIOCA) buoy data. *J. Geophys. Res.*, **106**, 2561–2572.
- Hoshino, M., H. Uekusa, A. Tomita, S. Koshihara, T. Sato, S. Nozawa, S. Adachi, K. Ohkubo, H. Kotani, and S. Fukuzumi (2012) : Determination of the structural features of a long-lived electron-transfer state of 9-mesityl-10-methylacridinium ion. *J. Am. Chem. Soc.*, **134**, 4569–4572.
- International Argo Project (2012) : *Argonautics No. 13*, <http://www.argo.ucsd.edu/Argonautics13.pdf>.
- INCOIS [Indian National Centre for Ocean Information Services] (2013) : <http://www.incois.gov.in/Incois/siber/siber.jsp>.
- Ishida, H., Y. W. Watanabe, J. Ishizaka, T. Nakano, N. Nagai, Y. Watanabe, A. Shimamoto, N. Maeda, and M. Magi (2009) : Possibility of recent changes in vertical distribution and size composition of chlorophyll-*a* in the western North Pacific region. *J. Oceanogr.*, **65**, 179–186.
- Ishii, M., H. Y. Inoue, T. Midorikawa, S. Saito, T. Tokieda, D. Sasano, A. Nakadate, K. Nemoto, N. Metzl, C. S. Wong, and R. A. Feely (2009) : Spatial variability and decadal trend of the oceanic CO₂ in the western equatorial Pacific warm/fresh water. *Deep-Sea Res. II*, **56**, 591–606.
- Ishii, M., N. Kosugi, D. Sasano, S. Saito, T. Midorikawa, and H. Y. Inoue (2011) : Ocean acidification off the south coast of Japan: A result from time series observations of CO₂ parameters from 1994 to 2008. *J. Geophys. Res.*, **116**, C06022, doi:10.1029/2010JC006831.
- 石川哲也 (2013) : X線自由電子レーザー SACLA. *ぶんせき*, **2013-2**, 71–78.
- 伊藤進一, 清水勇吾, 寛茂穂, 和川拓, 佐藤政俊 (2010) : 水中グライダー観測の実施状況. *月刊海洋*, **42**, 658–667.
- Iwamoto, S., D. M. Checkley, and M. Trivedi (2001) : REFLICS: Real-time flow imaging and classification system. *Mach. Vis. Appl.*, **13**, 1–13.
- Janzen, C., N. Larson, and D. Murphy (2008) : Long-term oxygen measurements. *International Ocean Systems*, **12** (2), <http://www.intoceansys.co.uk/articles-detail.php?iss=0000000004&acl=000000014>.
- Jiao, N., G. J. Herndl, D. A. Hansell, R. Benner, G. Kattner, S. W. Wilhelm, D. L. Kirchman, M. G. Weinbauer, T. Luo, F. Chen, and F. Azam (2010) : Microbial production of recalcitrant dissolved organic matter: long-term carbon storage in the global ocean. *Nat. Rev. Microbiol.*, **8**, 593–599.
- Johnson, K. S., R. M. Gordon, and K. H. Coale (1997) : What controls dissolved iron concentrations in the world ocean? *Mar. Chem.*, **57**, 137–161.
- Joñica, J., V. L. Fernández, D. Thouron, A. Paulmier, M. Graco, and V. Garçon (2011) : Phosphate determination in seawater: Toward an autonomous electrochemical method. *Talanta*, **87**, 161–167.
- 海洋研究開発機構 (2013) : <http://www.jamstec.go.jp/donet/j/donet/>.
- Kameyama, S., H. Tanimoto, S. Inomata, U. Tsunogai, A. Ooki, Y. Yokouchi, S. Takeda, H. Obata, and M. Uematsu (2009) : Equilibrator inlet-proton transfer reaction-mass spectrometry (EI-PTR-MS) for fast and sensitive measurements of dimethyl sulfide in seawater. *Anal. Chem.*, **81**, 9021–9026.
- Kameyama, S., H. Tanimoto, S. Inomata, U. Tsunogai, A. Ooki, S. Takeda, H. Obata, and M. Uematsu (2010) : High-resolution measurement of multiple volatile organic compounds dissolved in seawater using equilibrator inlet-proton transfer reaction-mass spectrometry (EI-PTR-MS). *Mar. Chem.*, **122**, 59–73.
- Kanda, J., T. Itoh and M. Nomura (2007) : Vertical profiles of trace nitrate in surface oceanic waters of the North Pacific Ocean and East China Sea. *La mer*, **45**, 69–80.
- Keeling, R. F., A. Körtzinger, and N. Gruber (2010) : Ocean deoxygenation in a warming world. *Ann. Rev. Mar. Sci.*, **2**, 199–229.
- Kim, S. B., Y. Takenaka and M. Torimura (2011) : A bioluminescent probe for salivary cortisol. *Bioconjugate Chem.*, **22**, 1835–1841.
- Kishi, M., M. Kashiwai, D. M. Ware, B. A. Megrey, D. L. Eslinger, F. E. Werner, M. Noguchi-Aita, T. Azumaya, M. Fujii, S. Hashimoto, D. Huang, H. Iizumi, Y. Ishida, S. Kang, G. A. Kantakov, H.-C. Kim, K. Komatsu, V. V. Navrotsky, S. L. Smith, K. Tadokoro, A. Tsuda, O. Yamamura, Y. Yamanaka, K. Yokouchi, N. Yoshie, J. Zhang, Y. I. Zuenko, and V. I. Zvalinsky (2007) : NEMURO-a lower trophic level model for the North Pacific marine ecosystem. *Ecol. Model.*, **202**, 12–25.
- 気象庁 (2013) : http://www.data.kishou.go.jp/kaiyou/db/vessel_obs/hq/index.php.
- Kobari, T., D. K. Steinberg, A. Ueda, A. Tsuda, M. W. Silver, and M. Kitamura (2008) : Impacts of ontogenetically migrating copepods on downward carbon flux in the western subarctic Pacific Ocean. *Deep-Sea Res. II*, **55**, 1648–1660.
- Kono, T., and M. Sato (2010) : A mixing analysis of surface water in the Oyashio region: Its implications and application to variations of the spring bloom. *Deep-Sea Res. II*, **57**, 1595–1607.
- Körtzinger, A., J. Schimanski, U. Send, and D. Wallace (2004) : The ocean takes a deep breath. *Science*, **306**, 1337.
- Kouketsu S., M. Fukasawa, D. Sasano, Y. Kumamoto, T. Kawano, H. Uchida, and T. Doi (2010) : Changes in water properties around North Pacific intermediate water between the 1980s, 1990s and 2000s. *Deep-Sea Res. II*, **57**, 1177–1187.
- Kouketsu, S., A. Murata, and T. Doi (2013) : Decadal changes in dissolved inorganic carbon in the Pacific Ocean. *Global Biogeochem. Cycles*, **27**, 65–76, doi:10.1029/2012GB004413.
- Krachler, R., F. von der Kammer, F. Jirsa, A. Süphandag, R. F. Krachler, C. Plessl, M. Vogt, B. K. Keppler, and T. Hofmann (2012) : Nanoscale lignin particles as sources of dissolved iron to the ocean. *Global Biogeochem. Cycles*, **26**, GB3024, doi:10.1029/2012GB004294.
- Kuwae, T., K. Kamio, T. Inoue, E. Miyoshi, and Y. Uchiyama (2006) : Oxygen exchange flux between sediment and water in an intertidal sandflat, measured *in situ* by the eddy-correlation method. *Mar. Ecol. Prog. Ser.*, **307**, 59–68.

- Laglera, L. M. and C. M. G. van den Berg (2009) : Evidence for geochemical control of iron by humic substances in seawater. *Limnol. Oceanogr.*, **54**, 610–619.
- Lampitt, R. S., B. Boorman, L. Brown, M. Lucas, I. Salter, R. Sanders, K. Saw, S. Seeyave, S. J. Thomalla, and R. Turnewitsch (2008) : Particle export from the euphotic zone: Estimates using a novel drifting sediment trap, ^{234}Th and new production. *Deep-Sea Res. I*, **55**, 1484–1502.
- Lee, J. M., E. A. Boyle, Y. Echevoyen-Sanz, J. N. Fitzsimmons, R. F. Zhang, R. A. Kayser (2011) : Analysis of trace metals (Cu, Cd, Pb, and Fe) in seawater using single batch nitrilotriacetate resin extraction and isotope dilution inductively coupled plasma mass spectrometry. *Anal. Chim. Acta*, **686**, 93–101.
- Lembke, C. (2012) : Overview of glider technology: Current and near-term capabilities. http://www.ioos.noaa.gov/glider/strategy/aug2012/lembke_state_of_technology.pdf
- Le Moigne, F.A.C., M. Villa-Alfageme, R. J. Sanders, C. Marsay, S. Henson, and R. García-Tenorio (2012) : Export of organic carbon and biominerals derived from ^{234}Th and ^{210}Po at the Porcupine Abyssal Plain. *Deep-Sea Res. I*, **72**, 88–101.
- Liu, K.-k, L. Atkinson, R. Quinones, and L. Talaue-McManus (2010) : *Carbon and Nutrient Fluxes in Continental Margins: A global synthesis*, Springer, Berlin, Germany, 741pp.
- Longhurst, A. R., A. Bedo, W. G. Harrison, E. J. H. Head, E. P. Horne, B. Irwin and C. Morales (1989) : NFLUX: a test of vertical nitrogen flux by diel migrant biota. *Deep-Sea Res.*, **36**, 1705–1719.
- Luz, B., and E. Barkan (2000) : Assessment of oceanic productivity with the triple-isotope composition of dissolved oxygen. *Science*, **288**, 2028–2031.
- 前田 勝 (1991) : 河口域は物質のフィルター, p. 176–180. 海と地球環境, 日本海洋学会編, 東京大学出版会.
- Martin, J. H., G. A. Knauer, D. M. Karl, and W. W. Broenkow (1987) : VERTEX: carbon cycling in the northeast Pacific. *Deep-Sea Res.*, **34**, 267–285.
- Martz, T. R. J. G. Connery, and K. S. Johnson (2010) : Testing the Honeywell Durafet® for seawater pH applications. *Limnol. Oceanogr., Methods*, **8**, 172–184.
- Mawji, E., M. Gledhill, J. A. Milton, G. A. Tarran, S. Ussher, A. Thompson, G. A. Wolff, P. J. Worsfold, and E. P. Achterberg (2008) : Hydroxamate siderophores: Occurrence and importance in the Atlantic Ocean. *Environ. Sci. Technol.*, **42**, 8675–8680.
- MBARI [Monterey Bay Aquarium Research Institute] (2010) : <http://www.mbari.org/auv/>.
- MBARI [Monterey Bay Aquarium Research Institute] (2013) : <http://www.mbari.org/mars/>.
- McGillicuddy Jr, D.J. and A.R. Robinson (1997) : Eddy-induced nutrient supply and new production in the Sargasso Sea. *Deep-Sea Res. I*, **44**, 1427–1450.
- Mecking, S., C. Langdon, R. A. Feely, C. L. Sabine, C. A. Deutsch, D.-H. Min (2008) : Climate variability in the North Pacific thermocline diagnosed from oxygen measurements: an update based on the U.S. CLIVAR/CO₂ Repeat Hydrography cruises. *Global Biogeochem. Cycles*, **22**, GB3015, doi:10.1029/2007GB003101.
- Messmer, V., G. P. Jones, P. L. Munday, S. J. Holbrook, R. J. Schmitt, and A. J. Brooks (2011) : Habitat biodiversity as a determinant of fish community structure on coral reefs. *Ecology*, **92**, 2285–2298.
- Midorikawa, T., H. Y. Inoue, M. Ishii, D. Sasano, N. Kosugi, G. Hashida, S. Nakaoka, and T. Suzuki (2012) : Decreasing pH trend estimated from 35-year time series of carbonate parameters in the Pacific sector of the Southern Ocean in summer. *Deep-Sea Res. I*, **61**, 131–139.
- Midorikawa, T., M. Ishii, N. Kosugi, D. Sasano, T. Nakano, S. Saito, N. Sakamoto, H. Nakano, and H. Y. Inoue (2012) : Recent deceleration of oceanic pCO₂ increase in the western North Pacific in winter. *Geophys. Res. Lett.*, **39**, L12601, doi:10.1029/2012GL051665.
- Misumi, K., D. Tsumune, Y. Yoshida, K. Uchimoto, T. Nakamura, J. Nishioka, H. Mitsudera, F. O. Bryan, K. Lindsay, J. K. Moore, and S. C. Doney (2011) : Mechanisms controlling dissolved iron distribution in the North Pacific: A model study. *J. Geophys. Res.*, **116**, G03005, doi:10.1029/2010JG001541.
- Mora, C., and D. R. Robertson (2005) : Causes of latitudinal gradients in species richness: a test with fishes of the tropical eastern Pacific. *Ecology*, **86**, 1771–1782.
- Morel, F. M. M., A. J. Milligan., and M. A. Saito (2003) : Marine Bioinorganic Chemistry: The Role of Trace Metals in the Oceanic Cycles of Major Nutrients, p. 113–143. In *Treatise on Geochemistry, Vol. 6*, edited by H. D. Holland and K. K. Turekian, Elsevier, New York.
- Murata, A. Y. Kumamoto, S. Watanabe, and M. Fukasawa (2007) : Decadal increases of anthropogenic CO₂ in the South Pacific subtropical ocean along 32°S. *J. Geophys. Res.*, **112**, C05033, doi:10.1029/2005JC003405.
- Murata, A., and S. Saito (2012) : Decadal changes in the CaCO₃ saturation state long 179°E in the Pacific Ocean. *Geophys. Res. Lett.*, **39**, L12604, doi:10.1029/2012GL052297.
- Murozumi, M., T. J. Chow, C. C. Patterson (1969) : Chemical concentrations of pollutant lead aerosol, terrestrial dusts and sea salts in Greenland and Antarctic snow strata. *Geochim. Cosmochim. Acta*, **33**, 1247–1294.
- Nakanowatari T., K. I. Ohshima, and M. Wakatsuchi (2007) : Warming and oxygen decrease of intermediate water in the northwestern North Pacific, originating from the Sea of Okhotsk, 1955–2004. *Geophys. Res. Lett.*, **34**, L04602, doi:10.1029/2006GL028243.
- Nellemann, C., E. Corcoran, C. M. Duarte, L. Valdés, C. De Young, L. Fonseca, and G. Grimsditch (2009) : *Blue Carbon: A rapid response assessment*. United Nations Environment Programme (UNEP), GRID-Arendal, 80pp.
- Nenes, A., M. D. Krom, N. Mihalopoulos, P. Van Cappellen, Z. Shi, A. Bougiatioti, P. Zampas, and B. Herut (2011) : Atmospheric acidification of mineral aerosols: a source of bioavailable phosphorus for the oceans. *Atmos. Chem. Phys.*, **11**, 6265–6272.
- NEPTUNE Canada (2013) : <http://www.neptunecanada.com/>
- 日油技研工業 (2013) : http://www.nichigi.co.jp/products/ocean/products/products_002.html
- Ning, L. A., J. Bauer, and E. R. M. Druffel (2004) : Variable ageing and storage of dissolved organic components in the open ocean. *Nature*, **430**, 877–881.
- Nishioka, J., T. Ono, H. Saito, T. Nakatsuka, S. Takeda, T. Yoshimura, K. Suzuki, K. Kuma, S. Nakabayashi, D. Tsumune, H. Mitsudera, W. K. Johnson, and A. Tsuda (2007) : Iron supply to the western subarctic Pacific: Importance of iron export from the Sea of Okhotsk. *J. Geophys. Res.*, **112**, C10012, doi:10.1029/2006

- JC004055.
- Nishioka, J., S. Takeda, C. S. Wong, and W. K. Johnson (2001) : Size-fractionated iron concentrations in the northeast Pacific Ocean: distribution of soluble and small colloidal iron. *Mar. Chem.*, **74**, 157–179.
- Nueter, J., and C. M. G. van den Berg (2005) : Determination of metal speciation by reverse titrations. *Anal. Chem.*, **77**, 11–19.
- Nunn, B. L., A. Norbeck, and R. G. Keil (2003) : Hydrolysis patterns and the production of peptide intermediates during protein degradation in marine systems. *Mar. Chem.*, **83**, 59–73.
- Ogawa, H., Y. Amagai, I. Koike, K. Kaiser, and R. Benner (2001) : Production of refractory dissolved organic matter by bacteria. *Science*, **292**, 917–920.
- Ogawa, H. and E. Tanoue (2003) : Dissolved organic matter in oceanic waters. *J. Oceanogr.*, **59**, 129–147.
- 小栗一将 (2013) : 堆積物－水境界における現場測定技術の最前線. 地球化学, **47**, 1–20.
- 岡英太郎, 磯辺篤彦, 市川香, 升本順夫, 須賀利雄, 川合義美, 大島慶一郎, 島田浩二, 羽角博康, 見延庄士郎, 早稲田卓爾, 岩坂直人, 河宮未知生, 伊藤幸彦, 久保田雅久, 中野俊也, 日比谷紀之, 寄高博行 (2013) : 海洋学の 10 年展望 (I) —日本海洋学会将来構想委員会物理サブグループの議論から— . 海の研究, **22**, 191–218.
- Okamura, K., H. Kimoto, K. Saeki, J. Ishibashi, H. Obata, M. Maruo, T. Gamo, E. Nakayama, Y. Nozaki (2001) : Development of a deep-sea in situ Mn analyzer and its application for hydrothermal plume observation. *Mar. Chem.*, **76**, 17–26.
- Okin, G. S., A. R. Baker, I. Tegen, N. M. Mahowald, F. J. Dentener, R. A. Duce, J. N. Galloway, K. Hunter, M. Kanakidou, N. Kubilay, J. M. Prospero, M. Sarin, V. Surapipith, M. Uematsu, and T. Zhu (2011) : Impacts of atmospheric nutrient deposition on marine productivity: roles of nitrogen, phosphorus, and iron. *Global Biogeochem. Cycles*, **25**, GB2022, doi:10.1029/2010GB003858.
- Ono, T., T. Midorikawa, Y. W. Watanabe, K. Tadokoro, and T. Saino (2001) : Temporal increases of phosphate and apparent oxygen utilization in the subsurface waters of western subarctic Pacific from 1968 to 1998. *Geophys. Res., Lett.*, **28**, 3285–3288.
- Opsahl, S., and R. Benner (1997) : Distribution and cycling of terrigenous dissolved organic matter in the ocean. *Nature*, **386**, 480–482.
- Palter, J. B., M. S. Lozier, J. L. Sarmiento, and R. G. Williams (2011) : The supply of excess phosphate across the Gulf Stream and the maintenance of subtropical nitrogen fixation. *Global Biogeochem. Cycles*, **25**, GB4007, doi:10.1029/2010GB003955.
- Passow U. (2002) : Transparent exopolymer particles (TEP) in aquatic environments. *Prog. Oceanogr.*, **55**, 287–333.
- PICES [The North Pacific Marine Science Organization] (2013) : <http://pacific.pices.jp/about.html>.
- Raateoja, M. P. (2004) : Fast repetition rate fluorometry (FRRF) measuring phytoplankton productivity: A case study at the entrance to the Gulf of Finland, Baltic Sea. *Boreal Env. Res.*, **9**, 263–276.
- Riser, S. C., and K. S. Johnson (2008) : Net production of oxygen in the subtropical ocean. *Nature*, **451**, 323–325.
- Rue, E. L., and K. W. Bruland (1995) : Complexation of iron (III) by natural organic ligands in the central North Pacific as determined by a new competitive ligand equilibration adsorptive cathodic stripping voltammetric method. *Mar. Chem.*, **50**, 117–138.
- Radhakrishnan, G., M. Yamamoto, H. Maeda, A. Nakagawa, R. KatareGopalrao, H. Okada, H. Nishimori, S. Wariishi, E. Toda, H. Ogawa, and S. Sasaguri (2009) : Intake of dissolved organic matter from seawater inhibits atherosclerosis progression. *Biochem. Biophys. Res. Commun.*, **387**, 25–30.
- Rysgaard, S., R. N. Glud, N. Risgaard-Petersen, and T. Dalsgaard (2004) : Denitrification and anammox activity in Arctic marine sediments. *Limnol. Oceanogr.*, **49**, 1493–1502.
- 才野敏郎 (2007) : 自動昇降式ブイシステムによる海洋基礎生産モニタリング. 沿岸海洋研究, **45**, 17–28.
- Saito, M. A., and J. W. Moffett (2001) : Complexation of cobalt by natural organic ligands in the Sargasso Sea as determined by a new high-sensitivity electrochemical cobalt speciation method suitable for open ocean work. *Mar. Chem.*, **75**, 49–68.
- Sarma, V. V. S. S., Abe, O., Honda, M., and Saino, T. (2010) : Estimating of gas transfer velocity using triple isotopes of dissolved oxygen. *J. Oceanogr.* **66**, 505–512.
- Sato, M., S. Takeda, and K. Furuya (2007) : Iron regeneration and organic iron (III) -binding ligand production during in situ zooplankton grazing experiment. *Mar. Chem.*, **106**, 471–488.
- Schaule, B. K., and C. C. Patterson (1981) : Lead concentrations in the Northeast Pacific - Evidence for global anthropogenic perturbations. *Earth Planet. Sci. Lett.*, **54**, 97–116.
- Shintani, T., M. Torimura, H. Sato, H. Tao, and T. Manabe (2005) : Rapid separation of microorganisms by quartz microchip capillary electrophoresis. *Anal. Sci.*, **21**, 57–60.
- Shintani, T. K. Yamada, and M. Torimura (2002) : Optimization of a rapid and sensitive identification system for Salmonella enteritidis by capillary electrophoresis with laser-induced fluorescence. *FEMS Microbiol. Lett.*, **210**, 245–249.
- 下島紀, 許正憲 (1998) : 化学センサの海洋学への適用—ISFETを用いた深海用 pH センサの開発—. 地球化学, **32**, 1–11.
- Sigg, L., F. Black, J. Buffle, J. Cao, R. Cleven, W. Davison, J. Galceran, P. Gunkel, E. Kalis, D. Kistler, M. Martin, S. Noel, Y. Nur, N. Odzak, J. Puy, W. Van Riemsdijk, E. Temminghoff, M. L. Tercier-Waeber, S. Toepperwien, R. M. Town, E. Unsworth, K. W. Warnken, L. P. Weng, H. B. Xue, and H. Zhang (2006) : Comparison of analytical techniques for dynamic trace metal speciation in natural freshwaters. *Environ. Sci. Technol.*, **40**, 1934–1941.
- Sohrm, J., E. A. Webb, and D. G. Capone (2011) : Emerging patterns of marine nitrogen fixation. *Nature Rev. Microbiol.*, **9**, 499–508.
- Spencer, R. G. M., B. A. Pellerin, B. A. Bergamaschi, B. D. Downing, T. E. C. Kraus, D. R. Smart, R. A. Dahlgren, and P. J. Hernes (2007) : Diurnal variability in riverine dissolved organic matter composition determined by *in situ* optical measurement in the San Joaquin River (California, USA). *Hydrol. Process.*, **21**, 3181–3189.
- Stocker, R. (2012) : Marine microbes see a sea of gradients. *Science*, **338**, 628–633.
- Stramma, L., G. C. Johnson, J. Sprintall, and V. Mohrholz (2008) : Expanding oxygen-minimum zones in the tropical oceans. *Science*, **320**, 655–658.
- Sugie, K., and T. Yoshimura (2013) : Effects of $p\text{CO}_2$ and iron on the elemental composition and cell geometry of the marine diatom

- Pseudo-nitzschia pseudodelicatissima* (Bacillariophyceae). *J. Phycol.*, **49**, 475–488.
- Sunderland, E. M. D. P. Krabbenhoft, J. W. Moreau, S. A. Strode, and W. M. Landing (2009) : Mercury sources, distribution, and bioavailability in the North Pacific Ocean: Insights from data and models. *Global Biogeochem. Cycles*, **23**, GB2010, doi:10.1029/2008GB0034.
- Taillefert, M., G. W. Luther III, and D. B. Nuzzio (2000) : The application of electrochemical tools for *in situ* measurements in aquatic systems. *Electroanal.*, **12**, 401–412.
- Takatani, Y., D. Sasano, T. Nakano, T. Midorikawa, and M. Ishii (2012) : Decrease of dissolved oxygen after the mid–1980s in the western North Pacific subtropical gyre along the 137°E repeat section. *Global Biogeochem. Cycles*, **26**, GB2013, doi:10.1029/2011GB004227.
- Takeda, S. (1998) : Influence of iron availability on nutrient consumption ratio of diatoms in oceanic waters. *Nature*, **393**, 774–777.
- Tanoue, E., S. Nishiyama, M. Kamo, and A. Tsugita (1995) : Bacterial membranes: possible source of a major dissolved protein in seawater. *Geochim. Cosmochim. Acta*, **59**, 2643–2648.
- Taylor, J. R., and R. Stocker (2012) : Trade-offs of chemotactic foraging in turbulent water. *Science*, **338**, 675–679.
- Tengberg, A., F. de Bovée, P. Hall, W. Berelson, D. Chadwick, G. Cicceri, Ph. Crassous, A. Devol, S. Emerson, J. Gage, R. Glud, F. Graziottini, J. Gundersen, D. Hammond, W. Helder, K. Hinga, O. Holby, R. Jahnke, A. Khripounoff, S. Liebermann, V. Nupenau, O. Pfannkuche, C. Reimers, G. Rowe, A. Sahami, F. Sayles, M. Schurter, D. Smallman, B. Wehrli, and P. de Wilde (1995) : Benthic chamber and profiling landers in oceanography—a review of design, technical solutions and functioning. *Prog. Oceanogr.*, **35**, 253–294.
- Teramoto, K., H. Sato, L. Sun, M. Torimura, and H. Tao (2007 a) : A simple intact protein analysis by MALDI-MS for characterization of ribosomal proteins of two genome-sequenced lactic acid bacteria and verification of their amino acid sequences. *J. Proteome Res.*, **6**, 3899–3907.
- Teramoto, K., H. Sato, L. Sun, M. Torimura, H. Tao, H. Yoshikawa, Y. Hotta, A. Hosoda, and H. Tamura (2007 b) : Phylogenetic classification of *Pseudomonas putida* strains by MALDI-MS using ribosomal subunit proteins as biomarkers. *Anal. Chem.*, **79**, 8712–8719.
- Traykovski, P., R. J. Latter, and J. D. Irish. (1999) : A laboratory evaluation of the laser *in situ* scattering and transmissometry instrument using natural sediments. *Mar. Geol.*, **159**, 355–367.
- Tsuda, A., S. Takeda, H. Saito, J. Nishioka, Y. Nojiri, I. Kudo, H. Kiyosawa, K. Imai, T. Ono, A. Shimamoto, D. Tsumune, T. Yoshimura, T. Aono, A. Hinuma, M. Kinugasa, K. Suzuki, Y. Sohrin, Y. Noiri, H. Tani, Y. Deguchi, N. Tsurushima, H. Ogawa, K. Fukami, K. Kuma, and T. Saino (2003) : A mesoscale iron enrichment in the western Subarctic Pacific induces a large centric diatom bloom. *Science*, **300**, 958–961.
- Tsunogai, U., Daita, S., Komatsu, D. D., Nakagawa, F., and Tanaka, A. (2011) : Quantifying nitrate dynamics in an oligotrophic lake using $\Delta^{17}\text{O}$. *Biogeochemistry*, **8**, 687–702.
- Uchida, H., T. Kawano, I. Kaneko, and M. Fukasawa (2008) : In Situ Calibration of Optode-Based Oxygen Sensors. *J. Atmos. Oceanic Technol.*, **25**, 2271–2281.
- 植松光夫, 平啓介, 奥田章順 (2003) : 飛行艇が新しい海洋観測時代を切り開く. *海の研究*, **12**, 517–527.
- Uematsu, M., Z. F. Wang, and I. Uno (2003) : Atmospheric input of mineral dust to the western North Pacific region based on direct measurements and a regional chemical transport model. *Geophys. Res. Lett.*, **30**, L1342, doi:10.1029/2002GL016645.
- Unisense (2013) : http://www.unisense.com/miniprofiler_mp4_system/.
- Valdes, J. R. and J. F. Price (2000) : A neutral buoyant upper ocean sediment trap. *J. Atmos. Oceanic Technol.*, **17**, 62–68.
- VENUS (2013) : <http://venus.uvic.ca/>.
- Verdugo, P. (2012) : Marine microgels. *Annu. Rev. Mar. Sci.*, **4**, 375–400.
- Veron, A. J., T. M. Church, A. R. Flegal, C. C. Patterson, and Y. Erel (1993) : Response of lead cycling in the surface Sargasso Sea to changes in tropospheric input. *J. Geophys. Res.*, **98**, 18269–18276.
- Villareal, T. A., C. Pilskaln, M. Brzezinski, F. Lipschultz, M. Dennett, and G. B. Gardner (1999) : Upward transport of oceanic nitrate by migrating diatom mats. *Nature*, **397**, 423–425.
- Volkman, J. K., and E. Tanoue (2002) : Chemical and biological studies of particulate organic matter in the ocean. *J. Oceanogr.*, **58**, 265–279.
- Watanabe, Y. W., T. Ono, A. Shimamoto, T. Sugimoto, M. Wakita, and S. Watanabe (2001) : Probability of a reduction in the formation rate of the subsurface water in the North Pacific during the 1980s and 1990s. *Geophys. Res. Lett.*, **28**, 3289–3292.
- Watanabe, Y. W., M. Shigemitsu, and K. Tadokoro (2008) : Evidence of a change in oceanic fixed nitrogen with decadal climate change in the North Pacific subpolar region. *Geophys. Res. Lett.*, **35**, L01602, doi:10.1029/2007GL032188.
- Whitney, F., S. Bograd, and T. Ono (2013) : Nutrient enrichment of the subarctic Pacific Ocean pycnocline. *Geophys. Res. Lett.*, **40**, 2200–2205.
- WHOI [Woods Hole Oceanographic Institution] (2013) : <http://www.whoi.edu/instruments/viewInstrument.do?id=1007>.
- Widdicombe, S., S. L. Dashfield, C. L. McNeill, H. R. Needham, A. Beesley, A. McEvoy, S. ørnevad, K. R. Clarke, and J. A. Berge (2009) : Effects of CO_2 induced seawater acidification on infaunal diversity and sediment nutrient fluxes. *Mar. Ecol. Prog. Ser.*, **379**, 59–75.
- Wiggert, J. D., R. R. Hood, S. W. A. Naqvi, K. H. Brink, and S. L. Smith (2009) : *Indian Ocean Biogeochemical Processes and Ecological Variability*, Geophysical Monograph Series Vol. 185, American Geophysical Union, 429pp.
- Wong, C. S., N. A. D. Waser, Y. Nojiri, F. A. Whitney, J. S. Page, and J. Zeng (2002) : Seasonal Cycles of nutrients and dissolved inorganic carbon at high and mid latitudes in the North Pacific Ocean during the Skaugran cruises: determination of new production and nutrient uptake ratios. *Deep-Sea Res. II*, **49**, 5317–5338.
- Yamashita, Y., and E. Tanoue (2008) : Production of bio-refractory fluorescent dissolved organic matter in the ocean interior. *Nature Geosci.*, **1**, 579–582.
- 安中さやか, 野尻幸宏, 中岡慎一郎, 小笠恒夫, 稲垣明, F. A. Whitney (2013) : 北太平洋における表層栄養塩の時空間マッピング, p.156. 2013年度日本海洋学会春期大会講演要旨集.
- Yuan, W., and J. Zhang (2006) : High correlations between Asian dust

events and biological productivity in the western North Pacific.

Geophys. Res. Lett., **33**, L07603, doi:10.1029/2005GL025174.

Zehr, J. P. (2011) : Nitrogen fixation by marine cyanobacteria. *Trends Microbiol.*, **19**, 162–173.

Decadal Vision in Oceanography (II)

—Discussions in the chemical oceanography subgroup of the future planning committee, The Oceanographic Society of Japan—

Jota Kanda^{1**}, Masao Ishii², Hiroshi Ogawa³, Tsuneo Ono⁴, Hajime Obata³,
Michiyo Yamamoto-Kawai⁵, Masahiro Suzumura⁶, Makio C. Honda⁷,
Youhei Yamashita⁸ and Yutaka W. Watanabe⁸

Abstract

Progress in oceanographic research in the past decade is reviewed and future direction in the Japanese oceanographic research in the next decade is discussed, mainly from the chemical oceanographic perspective. While biogeochemical cycle (or material cycle) remains to be a major theme in oceanography, innovative chemical sensors on various maneuverable platforms will be able to depict dynamics of chemical constituents with very fine resolution, equivalent of those utilized in physical oceanography; a high-definition or “high-vision” image of material cycle will be available to researchers in near future. On the other hand, process studies that unveil the mechanisms behind such dynamics should be implemented concurrently. Numerical modeling may effectively connect these two approaches, and interactions with technological innovations will facilitate progress of research. Current status and expectations of sensor/platform development, possible targets of the process studies, integration of the two research approaches, and some target oceanic regions for the integrated study are discussed, with respect to necessary infrastructures of research.

Key words: Oceanography, Future Planning, Biogeochemical Cycle,
Research Infrastructure

(Corresponding author's e-mail address: jkanda@kaiyodai.ac.jp)

(Received 29 May 2013; accepted 30 July 2013)

(Copyright by the Oceanographic Society of Japan, 2013)

1 Graduate Faculty of Marine Sciences, Tokyo University of Marine Science and Technology, 2 Meteorological Research Institute, Japan Meteorological Agency, 3 Atmosphere and Ocean Research Institute, The University of Tokyo, 4 Fisheries Research Agency, 5 Research Center for Advanced Science and Technology, Tokyo University of Marine Science and Technology, 6 National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, 7 Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, 8 Faculty of Environmental Earth Science, Hokkaido University

** Graduate Faculty of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan